

奇面城の秘密

江戸川乱歩

青空文庫

怪人四十面相

ある日、こうじまち 麹町 高級アパートのあけち 明智探偵事務所へ、ひとりのりっぱな紳士がたずねてきました。それは東京のみなと 港区にすんでいるかみやままさお 神山正夫という実業家で、たくさんの会社の重役をしている人でした。その神山さんが、明智探偵としたい友だちの実業家の紹介状をもつて、たずねてきたのです。

明智は、神山さんを応接室にとおして、どういうご用かと聞きますと、神山さんは、心配そうな顔で、

「じつは、明智さん。わたしは怪人四十面相に、脅迫されているのです。」
と、恐ろしいことをいうのでした。

「エッ、怪人四十面相？ そいつのもの名は怪人二十面相ですね。しかし、そいつは、三月つきばかりまえに、『宇宙怪人』の事件で、わたしがとらえて、いまは、刑務所にはいつているはずですが……。」

明智探偵は、いぶかしそうにいいました。

「ところが、やつは、とつくに牢やぶりをしていたのです。」

「それはおかしい。あいつが牢やぶりをすれば、すぐにわたしの耳にはいるはずですよ。また、新聞にものはずです。わたしは、まったく、そういうことを聞いておりません。」

「いや、それが、いまさつき、わかつたのです。わたしは、この事件を警察にしらせました。警察でも、あなたとおなじようにふしぎに思つて、刑務所をしらべたのです。すると、どうでしょう。四十面相はいつのまにか、まったくべつの人間といれかわつていたのです。」

四十面相によく似た男が、身がわりになつて刑務所の独どくぼう房にはいつていたのです。よくにているので、刑務所の係員も、いままで気づかないでいたといふのです。いつ、どうして、このかえだまと、いれかわつたかは、いくらしらべても、わからないのです。四十面相のかえだまになつたやつは、ばかみたくない男で、なにをたずねても、エヘラ、エヘラ、笑っているばかりで、どうすることも、できないのだそうです。」

それを聞くと明智探偵の顔が、ぐつと、ひきしまりました。いっこくも、すてておけない大事件です。

「ちよつと、お待ちください。」

明智はそういつて、いすから立つと、部屋のすみのデスクの上の電話器をとりました。

そして、しばらく話していましたが、もとのいすにもどって、

「いま、警視庁の中村警部にたずねてみましたが、おっしゃるとおりです。四十面相はずっとまえから、刑務所をぬけ出していたらしいのです。……ところで、その四十面相が、あなたを脅迫したというのは？」

「まず、さいしよは、十日ばかりまえに、とつぜん、へんな声の電話がかかってきたのです。きみのわるい、しわがれ声でした。」

その声が、近いうちに、レンブラントのS夫人像をちようだいにいくから、用心するがいいと、恐ろしいことをいって、ぷつぷり電話をきってしまいました。

レンブラントのS夫人像というのは、昨年わたしがフランスで手に入れてきたもので、数千万円のねうちの油絵です。これは、わたしが持ちかえったときに新聞にもりましたから、ごぞんじのことと思います。」

「知っています。あれは、日本人のもっている洋画のうちで、最高のものでしょう。その油絵は、どこにおいてあるのですか。」

「わたしのうちの洋館の二階の美術室にかけてあります。その部屋には、いろいろな西洋画がならべてあるのですが、みなレンブラントの足もとにもおよばないものばかりです。」

四十面相がレンブラントだけをねらったのは、さすがに目がたかいというものです。」

神山さんは、そういって、にが笑いをするのでした。

「で、まだ、ぬすまれたわけでは、ないのですね？」

「まだです。しかし、ここ四、五日があぶないと思います。じつは、きのうの朝、寝室で目をさましますと、ベッドのそばの机に、こんな手紙がのせてありました。うちのものをしらべても、だれも知らないといえます。どこから、どうしてはいつてきたか、まったくわからないのです。」

神山さんは、ポケットから西洋ふうとうをとりだし、なかの手紙を明智にわたしました。それには、こんな恐ろしい文句が書いてあったのです。

レンブラントのS夫人像は、きょうから五日のあいだに、かならずちようだいする。じゆうぶん警戒するがよろしい。きみのやしきを、警官隊にとりまかせても、おれはへいきだ。おれは魔法つかいだからね。では、きみのだいじなレンブラントに、わかれをつけておきたまえ。

四十面相より

「この手紙で、はじめて、あいてが四十面相とわかったのです。ひよっとしたら、だれか

のいたずらじやないかと思いましたが、ねんのために警察にとどけると、警察では刑務所をしたらべ、さつきもお話したように、四十面相が脱獄だつごくしていることがわかったのです。

警察では、けさから、十人の警官を、わたしのうちへよこして、警戒にあたらせてくれました。夜昼こうたいで、いつも十人の見はりがついているのです。それに、わたしのうちには大学にかよっているむすこもいますし、書生しよせいもふたりいるほかに、わたしが社長をしている会社の若い社員に、三人ほどとまりにきてもらっているので、美術室のまわりはむろん、やしきのまわりにも、ぐるっと、見はりがついているわけです。

警察では、いくら四十面相でも、これだけ警戒すれば、だいじょうぶだろうというのですが、なにしろ四十面相というやつは、魔法つかいですからね。わたしは、どうも安心ができないのです。

そこで、これまで、たびたび四十面相を手がけていらつしやる明智さんに、ご相談するほかはないと考えたわけです。ひとつ、お力をおかしねがえないでしょうか。」

明智探偵はそれを聞くと、ふかくうなずきながら、

「しようちしました。できるだけやつてみましょう。いまの電話で、中村警部も、わたしに手をかしてくれとたのんできました。」

それに四十面相は、二十面相と名のついていたころから、わたしにとつては、きつてもきれない関係のあるやつですからね。こいつがあらわれたと聞いては、わたしも、うしろを見せるわけにはいきませんよ。」

と、につこり笑ってみせるのでした。神山さんは、たのもしげに明智の顔を見て、

「それをうかがって、わたしも安心しました。わたしのためばかりではありません。四十面相をのばなしにしておいたなら、どんな恐ろしいことをはじめるかしれませんからね。世間のためですよ。どうか、お力をおかしくください。」

「よくわかりました。では、これからごいつしよに行つて、おたくを拝見することにしませう。ことに美術室は、よく見ておかなければなりません。それには、わたしひとりではなく、少年助手の小林こばやしをつれて行きたいのですが、かまいませんでしょうね。小林は、よくあたまのはたらく、すばしっこい少年で、たいへん手だすけになるのです。」

「かまいませんとも。小林少年のことは、わたしもよく知っていますよ。わたしのすえの男の子どもが、小学校六年生ですが、これが小林君の大ファンなのですよ。小林君がきてくださったら、大よろこびでしょう。」

「ハハハハ……、小林は、少年諸君に、すっかり有名になってしまいましたからね。小林

が町を歩いていると、小学生の男の子や女の子が集まってきて、サインをもとめるのですよ。そんなとき、小林ははずかしがって、顔をまっ赤にしていますかね。」

「そうでしょう。うちの子どもなんかも、小林少年に夢中ですからね。」

そこで明智がベルをおしますと、じきにドアがひらいて、りんごのようなほおをした小林少年の顔がのぞきました。

「小林君、四十面相が脱獄したんだ。そして、この神山さんのおうちにあるレンブラントの油絵を、ぬすみだすという予告をしたんだ。いつものやりくちだよ。で、いまから神山さんのおたくへいくのだが、きみもいつしよにきてくれないか。」

「ええ、つれてつてください。でも、四十面相のやつ、どうして脱獄したのですか。」

「それは、車の中でゆっくり話す。かえだまをつかったんだよ。」

「あ、それじゃあ、いつかの手ですね。」

「うん、あいつのとくいのやりくちだ。……どうだ、小林君、むしやぶるいが出ないかね。こんどは、きみに大役をたいやくつとめてもらうつもりだよ。」

「ええ、ぼく、なんでもやります。あいつには、ずいぶん、ひどいめにあっているのですからね。かたきうちです。」

そして、三人は階段をおり、アパートの入口にまたせてあった神山さんの自動車に乗って、港区の神山邸へといそぐのでした。

アドニス像

明智探偵と小林少年は神山邸につくと、見はりをつとめている警官とも話しあい、やしきのうちそとを、くまなく見てまわり、ことにレンブラントの油絵のかかっている美術室は、ねんいりにしらべました。そしてある計画をたてたのです。それが、どんな計画だったかは、やがて、わかるときがくるでしょう。

それから四日のあいだは、なにごともなくすぎりましたが、警官隊の見はりには、昼も夜も厳重につづけられ、いかに四十面相でも、これでは、しのびこむすきもないように見えませんでした。

そのあいだに、ひとつだけ、ちよつと、へんなできごとがありました。明智と小林少年が、はじめて神山邸をしらべた、つぎの朝のことです。神山さんが、美術室へはいってみると、部屋のすみに立ててあったアドニスの石膏像せつこうが、まっぶたつにわかれて、ころがつ

ていたのです。

そのまわりには、こなごなにわれた、石膏のかけらがとびちり、そばに、野球のボールがころがっていました。その原っぱで野球をしていたボールが、ひらいた窓からとびこんで、石膏像の腹にあたっただけらしいのです。

美術室の窓は、いつもしめきつて、かけがねがかけてあるのですが、女中さんがそうじをするときには、窓をあけますから、窓をあけておいて、女中さんが、ちよつと部屋を出たときに、ボールがとびこんだのかもしれない。

アドニスというのは、大むかしのギリシア神話のなかに出てくる美しい青年で、そのはだかの像を有名な彫刻家がいくつもつくったのですが、いまのこっているのは、ごくわずかです。ほんものは大理石にほったものですが、フランスの美術商が、それとそっくりの石膏像をこしらえて売りだしたのを、神山さんが買って帰ったもので、青年アドニスが、はだかで立っている、おとなよりも大きな美しい石膏像です。それが野球のボールで、まっつたつにわれてしまったのです。

この石膏像は、大きくても、たいしてねうちのあるものではありませんが、神山さんが、はるばるフランスから買ってきたものですから、そのままにしておくわけにはいきません。

さつそく、ハヤノ商会という石膏像せんもんの店に電話をかけて、もどおりにつがせることにしました。

すると、ハヤノ商会の人がやってきて、この場でなおすことはできないからというので、われた石膏像をトラックにつんで、工場へもちかえりましたが、それが四日めに、もとのとおりにつぎあわされて、もどつてきました。ハヤノ商会の四人の人夫が、それを二階の美術室にかつぎあげて、もとの場所においてかえりました。

警察では、この人夫たちのうちに、四十面相の手下がまぎれこんでいたら、たいへんだというので、石膏像をはこび出したときにも、持ちこんだときにも、嚴重に見はつていましたが、べつにあやしいこともなかったのです。

レンブラントのS夫人像は、もとのところにかかったままです。銀行の大金庫の中へでも、あずけたらという意見も出ましたが、持ちはこびなんかしたら、その道があぶないというので、美術室から動かさないことにしたのです。

さて、石膏像が持ちこまれた日は、ちょうど四十面相の手紙にあった、五日めにあたつていました。五日以内に、かならずぬすみだしてみせるというのですから、きょうの夜なかなまでが期限です。それをすぎれば、四十面相は負けたことになります。

いまは午後の三時です。夜なかまでは、もう九時間しかありません。警戒は、いよいよ厳重になりました。警官と書生や社員などをあわせて十数名の強そうな男たちが、やしきのあらゆる場所に見はりをつづけているのです。

神山邸の洋室の書斎には、主人の神山さんと、明智小五郎と、警視庁の中村警部とがテーブルをかこんで、ひそひそと話しあっていました。

「明智君、きみは、なにか考えがあるようだが、だいじょうぶだろうね。今夜がいちばんあぶないのだ。どうだろう、われわれ三人で、夜あかしをして、美術室にがんばっていることにしたら？」

中村警部が、心配そうな顔で、そんなことをいいますのでした。

「それもいいが、ぼくに考えがある。美術室は、からっぽにしておくほうがいいのだよ。ちゃんと、ぬすまれないようなてだてがしてあるから、安心したまえ。

四十面相は、これまでにも、たびたび、こういう予告をした。そして、ちゃんと予告どおりにやってみせた。ぼくたちはいつもあいつに、出しぬかれている。いくら厳重に見はつていても、あいつにかかつては、なんにもならない。

だから、こんどは、がらつと、やり方をかえて、美術室はからっぽにしておこうと思う

のだ。むろん、ドアや窓には、かぎをかけてあるがね。

つまり、さそいのすきを見せるのだよ。そして、あいつを、おびきよせておいて、つかまえようというわけさ。」

明智探偵は、自信ありげにいうのでした。

「しかし、やしきのまわりの見はりには、やつぱりつづけたほうがいいでしょうね。いくら四十面相でも、鳥のように飛んでくるわけではないでしょうから、見はりさえしておれば、美術室へはいることができないのですからね。」

神山さんが、心配そうに口をはさみました。

「いや、それも、ほんとは、どうでもいいのです。いくら見はっていても、あいつはちゃんと、やつてきますよ。しかし、いざというときに、手だすけになりますから、見はりには、やつぱり、つづけたほうがいいでしょうね。」

明智は、やしきのまわりの見はりも、ひつようがないというのです。そのうえ、美術室をからつぽにしておくのですから、神山さんや中村警部には、なんだか、あぶなっかしいように思われるのです。

やがて、夜になりました。

美術室の窓には、中からかけがねをかけ、ドアには外からかぎをかけ、ふたりの書生が、その外の廊下にいすをおいて、見はりをしていました。

十人の警官は、家のまわりをかこんで、すこしのゆだんもなく、警戒についていました。中村警部は、たえず、そのへんを歩きまわって、見はりの人々のかんとくをしていました。

明智探偵は、日のくれるころどこかへたちきつたまま、まだ帰ってきません。このかんのときに、名探偵は、いったい、なにをしているのでしょうか。

だんだん夜がふけていきました。

どこかで、時計が十時をうつのが聞こえました。

そのとき、二階の美術室の中に、ふしぎなことがおこったのです。

美術室は、小さな電灯ひとつだけをのこして、ぜんぶの電灯が消してありました。そのうすぐらい中で、パチツ、パチツと、なにか、もののはぜるような音がしています。鼠ねずみがなにかかじっている音でしょうか。いや、このりっぱな美術室に鼠なんか出るはずがありません。

ああ、ごらんなさい。あのアドニスアドニスの巨大な像が、かすかにゆれているではありません

か。石膏像が生きて動き出したのでしょうか。

やがて、もつとふしぎなことがおこりました。

パチツ、パチツと、石膏像がひびわれはじめたのです。そして白い石膏のおもてに、こまかいすじが、いくつもできて、そのすじが、みるみる広がっていくではありませんか。

パラパラツと、石膏のかけらが床に落ちました。それが、だんだん大きくなってくるのです。

床には、じゆうたんがしいてあるので、その音は、ドアのそとまで聞こえません。

石膏のひびわれは、いよいよ大きくなり、そのあいだから、なにか黒いものが、あらわれてきました。

やがて、右の足がひぎのへんからはなれて、その中から、べつの黒い足が、ニュツと出てきました。つぎに、左の足に、おなじことがおこり、ひぎの上に石膏をかぶった黒い二本の足が、だいぎ台座からじゆうたんの上におりてきました。

右左の手が、肩のところから、すつぽりとぬけて床に落ち、その下から、べつの黒い手があらわれました。

それから二本の黒い手が、いそがしくはたらいで、からだをおおっていた石膏を、ぜん

ぶとりのけてしまいました。

それは、まっ黒なシャツをきた、ひとりの人間だったのです。あたまにも黒い覆面をかぶっています。目のところだけくりぬいてあるのです。アドニス像の中には、生きた人間がかくれていたのです。

屋根の上

いうまでもなく、この男が四十面相でした。かれはアドニスの石膏像が修繕に出されたとき、ハヤノ商会という石膏商といつわって、その像を持ちだし、じぶんをその中にとじこめてもらって、四人の部下に神山邸へはこばせたのです。部下はハヤノ商会の店員に化けて、うまくそのアドニス像を、美術室にもどしておいたのです。

二階の美術室には、うす暗い電灯が一つだけつけてありました。見はりの書生がふたり、ドアのそとの廊下にいるばかりで、室内にはだれもおりません。明智探偵が、わざと、そうしておいたのです。

石膏をやぶって、あらわれた黒シャツの四十面相は、あたりを見まわしてだれもない

ことをたしかめると、壁にかけてあるレンブラントのS夫人像のところへいって、それを壁からおろし、かくぶちをはずして、木のわくにとりつけてあるカンバスを、ていねいはぎとりました。そして、それを、くるくると、棒のようにまいてしまったのです。わくのまま持ちだしてはかさばりますので、油絵のカンバスだけをまるめて、持ちやすくしたのです。

それから、腰にまきつけていた大きな黒いふろしきをはずすと、まるめたカンバスをつつみ、それをななめに背中にしよって、ふろしきの両方のはしを、胸のまえでむすびました。こうしておけば、逃げだすときに両手が自由で、身がるに動けるからです。

四十面相は、その仕事を、すこしもの音をたてないようにやってのけました。さつき石膏像をやぶったときにも、音がしないように注意しましたし、床にあついじゅうたんがしいてあるので、いくらか音がしても、そとまでは聞こえなかったのです。

ですから、廊下に見はついていたふたりの書生は、四十面相が美術室の中で、レンブラントの油絵をぬすんでしまったなどは、すこしも知りませんでした。ふたりは四十面相が、そこからやってくると思つていたのです。

四十面相は、美術室のガラス窓を、音のしないようにひらくと、ひよいと窓わくの上に

とびあがり、そのそとにとりつけてあるといをつたって、さるのように身がるに、大屋根にのぼっていききました。

かれは大屋根なんかへのぼって、いったい、どうするつもりなのでしょう。神山さんの西洋館は、ひろい庭のまんなかたつているので、となりの家の屋根へとびうつつて逃げだすというようなことは、思いもよらないのです。

西洋館のまわりをとりかこんでいる警官たちも、四十面相が屋根へ逃げるなんて、すこしも考えていなかったのです、だれも上のほうは注意していません。四十面相は、そこからはいってくるとばかり思っていたのです。

しかし、そのなかで、たつたひとり、なんだかへんだなと気づいた警官がありました。その警官も、屋根のほうを見ていたわけではありませんが、なにげなくふと顔を上にあげたとき、大屋根にとびついた四十面相の二本の足だけが、目のすみにうつつたのです。

その足は、すぐに、大屋根の上に見えなくなってしまうましたが、一瞬間、灰色のコンクリートの壁のてっぺんのところ、ぶらんとさがっている、二本の黒い棒のようなものが見えたのです。

警官は、それが人間の足だとは、おもいもありませんでした。まっ暗な中ですから、は

つきり見えたわけではなく、なんだか、そんな気がしたのです。

その警官は、大屋根の上を、じつと見つめました。屋根の上は、いっそう暗いので、なにも見えませんが、気のせいか、赤いかわらの上を、まっ黒なやつが、じりじりとはいあがつていくような感じがしました。

たとえ気のせいでも、いちおう中村警部に報告したほうがいいと思いました。そこで、その警官は、やはり庭に立っている中村警部をさがし出して、このことを知らせたのです。中村警部のそばには、明智探偵と小林少年が、どこからかもどってきて立っていました。明智はいまの報告を聞くと、

「うん、やつぱりそうだ。もう絵はぬすまれたかもしれない。ぬすんだとすれば、警官にかこまれている庭へ、おりてくることはできないから、屋根にのぼるしかないわけだね。」と、なにもかも知っているようなことをいいました。

「エッ、もうぬすまれたって？ どうして、それがきみにわかるんだ。四十面相は、いつたい、どこからのびこむことができたのだろう。きみはそれを知っていて、なぜふせがなかったのだ。」

中村警部が、明智をせめるようにどなりました。

「いや、知っていたわけじゃない。あいつのことだから、魔法つかいのようにどこからかしのびこんで、いまごろは、もう、ぬすんでしまったかもしれないと、想像してるんだよ。」

「なんだって？ それじゃ、きみにもあいつのしのびこむのを、ふせぐことができなかったというのか。」

「いや、ちゃんとふせいである。これには、ちよつと、わけがあるんだ。くわしいことはあとで話すがね。ともかく、美術室をしらべてみよう。もし油絵がぬすまれていたら、あいつが屋根へ逃げたというのは、ほんとうにちがいない。」

「うん、すぐにいつてみよう。」

中村警部も、美術室をしらべてみるのが、だいいちだと思いましたが、明智のことばに賛成して、もうそのほうへ、かけだしてました。明智探偵と小林少年も、それにつきまします。

二階の美術室へはいつて、かぎでドアをひらくと、中村警部は、「アッ。」と叫んで、立ちすくんでしまいました。

そこには、アドニスアドニスの石膏像が、ばらばらにくだけて、とびちっていたからです。

「これはどうしたことだ。きょう修繕して、持ってきたばかりじゃないか。それをまた、こんなにかわしてしまった。こんな夜ふけに、野球をやっているやつがあるんだろうか。」
警部が、あつけにとられてつぶやきました。

「こんどは、ボールがあたってこわれたのじゃないよ。中からこわしたやつがあるんだ。」
明智が、みょうなことをいいました。

「エツ、中からだって？ それは、どういういみだ。」

「この石膏像の中に、四十面相がかくれていたのさ。」

「エツ、あいつが？ かくれていた？ おい、明智君、きみはそれを知っていたのか？
知っていないながら、どうしていままで……。」

「いや、いや、知っていたわけじゃないよ。いまここへきて、やっと気がついたのだ。このわれかたでわかったのだ。ぼくも、うかつだった。あいつのやりそうな手だからね。それを考えなかったのはぼくの手おちだった。」

明智は、残念そうにいました。

そのとき、中村警部は、またしても、「アツ。」という叫び声をたてたのです。

「アツ、ぬすまれたツ。見たまえ、レンブラントのがくぶちがおろしてある。中はからつ

ぼだツ。」

「うん、ぼくの思ったとおりだ。あいつは、やつぱり、ぬすんでいった。しかしね、中村君、これは心配しないでもいい。ぼくが、きつと、取りかえしてみせるよ。」

明智は、自信ありげに、きつぱりと、いいきるのでした。

「それじゃあ、あいつは、レンブラントのカンバスだけを取りはずして、それを持って屋根の上へ逃げたというのだね。」

「うん、そうにちがいない。屋根のほかに逃げる場所はないからね。」

「四方をかこまれているんだから、屋根へのぼったって、逃げられるわけではない。いったい、あいつは、どうするつもりなんだろう。」

中村警部が、ふしぎそうにいます。

「あいては魔法つかいだ。どんな手があるかもしれない。ともかく屋根の上を、見はるひつようがあるね。それには、ふつうの電灯なんかでは、暗くてよく見えないだろう。消防自動車を呼ぶんだね。そうすれば、探照灯たんしやうとうもあるし、長い自動ばしごもある。それがいちばんいいよ。」

「うん、それがよさそうだね。じゃ、ぼくが消防署へ電話をかけることにしよう。」

中村警部はそういつて、あたふたと階下へおりていきました。

いっぽう、庭のほうでは、警官たちが、階下の部屋の電灯にコードをつぎたして、庭から大屋根を照らし、みんなで、そこをながめていました。

「アツ、黒いものが動いた。たしかに、あいつだよ。」

「うん、屋根の上にひらべったくなくなっているけれども、ブーツと黒く見えるね。あれが四十面相にちがいない。警部さんに、報告しよう。」

そういつて、ひとりの警官が、西洋館へとびこんでいくのでした。

水ぜめ

しばらくすると、赤い消防自動車がかつけ、門から庭へはいつてきました。中村警部のさしずで、探照灯が点じられ、白い棒のような強い光が、西洋館の大屋根を照らしました。

やっぱりそうです。黒いシャツをきた男が、ぴったりと、屋根にからだをくつつけて、はらばいになっています。そのすがたが、はつきりと照らしだされたのです。

四十面相は、顔をふりむけて、まぶしそうに、こちらを見ました。そして、いきなり逃げだしたのです。逃げだすといつても屋根のそとへは出られません。とびおりたりなんかすれば、死んでしまうばかりです。

かれは、屋根をはつて、頂上のむねがわらまでたどりつくと、ひよいと、それをまたいで、むこうがわに、すがたを消してしまいました。

探照灯の光は、むねがわらのむこうまでは、とどきませんから、四十面相を見うしなわないためには、自動車を、むこうがわにまわして、そこから探照灯をあてるほかはありません。

消防車の運転手は車を動かして、うらへまわろうとしました。それを見た中村警部は、「いや、このままでいい。あっちへまわったら、あいつはこっちがわの屋根へ逃げるだろう。そうすれば、また、ここへもどつてこなければならぬ。あいつがむねがわらを、こえるのはすぐだけれども、自動車をむこうへまわすのはたいへんだ。それより、自動ばしごをのびなさい。そうして、大屋根までとどかせてくれれば、ぼくの部下がのぼつていて、あいつをつかまえるよ。」

と、さしずをしました。

すると、ガラガラツとモーターがまわって、自動ばしごが、上へ上へのびはじめました。そして、みるまに、大屋根の高さになったのです。

そういうことになった、中村警部の部下のふたりの警官が、くつをぬぎ、上着をぬぎ、みがるないでたちになって、空にむかつて、まっすぐに立っている自動ばしごを勇敢にのぼっていきます。

警官隊のうち、うらがわに三人ばかりのこして、みんな消防自動車のまわりに、集まっています。主人の神山さんも、書生たちも、その中にまじっています。明智探偵と小林少年だけは、どこにも、すがたが見えないのでした。

四十面相が、屋根に逃げるすこしまえにも、ふたりは、どこかへ、すがたをくらましていましたが、このかんじんなときに、またもや、ゆくえがわからなくなってしまったのです。いったい、どこへいったのでしょうか。

ふたりの警官は、もう自動ばしごの三分の二ほどを、のぼっていました。あと二メートルで、大屋根にとどきます。

そのとき、むねがわらのむこうから、四十面相のあたまが、ひよいと、こちらをのぞきました。そして、警官たちが、はしごをのぼってくるのに気づいたようすです。

ふたりの強そうな警官が、屋根へあがってきたら、もうおしまいです。かれらは、手てじょ錠じょうやとりなわを持っています。腰のサックには、たまをこめたピストルまで用意しているのです。四十面相がいくら強くても、とてもかなうものではありません。

四十面相は、どうするつもりでしょう。とうとう、つかまってしまおうのでしょうか。

見ていると、かれは、むねがわらをのりこして、のこのこと、こちらがわの屋根へ出てきました。そして、だんだん、屋根のはしのほうへ、おりてくるのです。いったいなにをしようというのでしょうか。

「オヤツ、やつは、とびおるかもしれないぞ。救命具を用意したまえ。」

中村警部の声に、消防手たちは、車にそなえつけてある、まるいズツクの救命具を取りだして、五人でそれをひろげ、屋根の下へ近づきました。とびおりてくる四十面相のからだを、そのまるいズツクの上に、うけとめようというのです。

しかし、四十面相は、とびおるけいはありません。かれは、屋根のつばなまでくると、そこにかかっていた自動ばしごに両手をかけて、力まかせに、ゆさぶりはじめたではありませんか。

そのために、いまにも屋根に手をかけようとしていた警官が、ふいをつかれて、ずるず

るツと、はしごをすべり落ちました。

「アツ、あぶないツ。」

そのまま、下まで落ちてくるのではないかと、手に汗をにぎりましたが、三だんほど、すべり落ちただけで、はしごのよこ木につかまって、やっとのことで、ふみとどまりました。あとからのぼっている、もうひとり警官は、まだずっと下のほうにいたので、ふたりが、ぶつつかりあうこともなかったのです。もし、ぶつつかれば、ふたりとも、命はないところでした。

さきの警官は、これにくっせず、またはしごをのぼって、屋根に手をかけようとしたが、四十面相は、それを待ちうけていて、また、はしごを、ゆさゆさと、ゆさぶるので、す。

こんどは、用心をしていたので、すべり落ちないですみましたけれど、こんなにゆさぶられては、とても屋根にのぼることはできません。

しかたがないので、警官は、腰のサックからピストルをとりだしました。

「こらツ、てむかいをするとぶつぱなすぞツ。命がないぞツ。」

そうどなっておいて、空にむかつて、一ぱつ、だあんと発射しました。

「ワハハハハ……。」

四十面相は、さもおかしそうに、笑いだすのでした。

「ワハハハハ……、そんなおどかしは、おれにはきかないよ。おれは、なんにも武器を持つていないのだ。武器を持たない相手を、殺すことはできないはずだね。いくらおどかしの空砲くうほうをうったって、おれは、びくともしないよ。ワハハハハ……、ざまあみろ。」

こんな相手にかかつては、どうすることもできません。四十面相のからだを、うつことはできないのを、ちゃんと知っているのです。警官はあきらめて、ピストルを腰のサツクに、もどしてしまいました。そして、また、いくども屋根にとりつこうとしましたが、そのたびに、四十面相が、はしごをゆさぶるので、落ちないようにしがみついているのがやつとでした。とても犯人をつかまえることなどできるものではありません。

下では、中村警部たちが、相談していました。

「水ぜめにしたらどうだろう。ホースで、あいつに水をぶっかけるんだよ。そうすれば、すべて落ちてくる。それを、救命具でうけとめればいい。」

中村警部がいいますと、主任の消防手も賛成しました。

「やってみましょうか。消火栓しょうかせんをひらいてホースをつなげばいいのです。ホースの水は、

ひじょうな力ですから、あいつはきつと、すべりますよ。」

「うん。それをやるほかはないと思うね。だが、うまくうけとめられるかな。やりそこなったら、あいつは死んでしまうからね。あいつを殺してはいけけないのだ。なかなか、むずかしい仕事だよ。」

中村警部は、心配そうに首をかしげました。

こんなとき、明智探偵がいたら、もつといい知恵を出してくれるのですが、明智も小林少年も、どこへいったのか、まだすがたを見せないのです。

「よしッ、やってみよう。しかし、注意しておくがね、ほんとうに、すべり落ちるまでやらないで、ただ、あいつをびつくりさせればいいのだ。いまにも、すべり落ちそうになれば、いくらあいつだって、手をあげるにちがいない。そのとき、はしごをのぼって、ひつくくつてしまえばいいのだからね。」

中村警部は、とうとう、決心をして命令をくだしました。

そこで、ホースがのぼされ、消火栓につながれました。地面をはっている白いホースが、へびのようにのたうつて、ふくらんできました。

ふたりの消防手が、ホースのつつ先をにぎっています。

ホースのふくらみがツウツとのびて、つつ先にたつしました。そして、音をたてて水がほとぼしりはじめました。

水は一本の白い棒になって、そとに吹きあげています。つつ先はすこしずつ、むきをかえ、大屋根のつばなにむけられました。

四十面相は、あたまから夕立のような水をかぶり、あわてて、屋根にはらばいになりました。水のいきおいは、刻一刻、はげしくなるばかりです。

空からの怪音

怪人は、いまにも水の力でおしながされ、屋根からすべり落ちそうです。

下では五人の消防手が、ズツクの救命具をひろげて、怪人が落ちてくるのを、待ちかまえていました。

ああ、もうぜつたいぜつめいです。怪人は死にもぐるいで、屋根のかわらにしがみついています。いつまでもがんばれるものではありません。やがて力がつき、水におしながされ、屋根からすべり落ちるにきまつているのです。

さすがの怪人四十面相も、とうとう、つかまってしまおうのでしょうか。しかし、あいつは魔法つかいみたいなやつです。どんな奥の手を用意していてもかぎりません。

そのとき、どこからか、ぶるるるる……という、へんな音が聞こえてきました。

消防自動車のモーターの音ではありません。ホースからほとぼしる水の音でもありません。それらとはちがったへんな物音が、まっ暗な空のむこうから、ひびいてくるのです。そのふしぎな音は、刻一刻と高くなってきました。

ぶるるるん。

ぶるるるん、ぶるるるん。

飛行機が飛んでいるのでしょうか。いや、飛行機の音とも、どこかちがっています。

「アツ、星が飛んでいる。流星かな？ 流星にしては、いやにゆっくり飛んでいる。おい、あれを見たまえ。へんな星みたいなものが飛んでくるよ。」

ひとりの警官が、そばに立っている警官に、そのほうを指さしてみせました。

「うん、飛んでくるね。だが星じゃない。アツ、あれはヘリコプターだぜ。さっきからのへんな音は、プロペラの音だよ。」

そういつているうちに、夜空にもくつきりと、ヘリコプターのすがたが浮きだしてきま

した。

ぶるるるん、ぶるるるん、ぶるるるん……。

プロペラの音は、話し声も聞こえないほど大きくなり、空からは、あやしい風が吹きつけてきました。

「アツ、屋根のまうえにとまった。ヘリコプターが、四十面相を助けだしにきたんだッ！」
 そうです。ヘリコプターは、洋館の二階の屋根のまうえにとまっています。プロペラをゆつくりまわして、ちょうしをとりながら、その空中に、じっと浮かんでいるのです。

ガラスのようなプラスチックでかこまれた操縦室のドアが、サツとひらくのが見えました。

操縦室には、ふたりの人間のすがたが小さく見えています。そのうちのひとりが、ひらいたドアのところから、なにか長いものを、下へ落とすのが見えました。

「アツ、縄なわばしごだッ。四十面相を縄なわばしごで、ヘリコプターの中へひきあげるつもりだッ。」

地上の人々の口から、ワアツという、どよめきがおこりました。しかし、どうすることもできません。

縄ばしごは、屋根のむねのむこうがわにあり、四十面相は、そのほうへはいよっていくのです。

ホースの水は、あいかわらず怪人のあたまの上から、ふりそいでいますが、かれをすべらせることはできません。四十面相は、かわらにしがみついて、すこしずつ屋根のむねに近づき、とうとうむねを乗りこして、むこうがわへすがたを消してしまいました。

「アツ、のぼっていく。のぼっていく。四十面相が、縄ばしごをのぼっていく……。」「くやしそうな叫び声がおこりました。やつぱりヘリコプターは四十面相のみかただったのです。空から怪人をすくいだしにきたのです。

「おい、水をぶっかけろ、そして、あいつを、縄ばしごから落としてしまえ。」「中村警部が、やつきとなつてどなりました。しかし、残念ながら、ホースの水は縄ばしごまで、とどかないのです。

四十面相の黒いすがたは、ヘリコプターの操縦室のすぐ下まで、のぼりつききました。かれは、左手で縄ばしごを持ち、右手をはなして、地上の人たちをあざけるように、その手を空中にひらひらさせています。

「ワハハハハ……。諸君、ごくろうさま。レンブラントの名画は、たしかにちようだい

したよ。それじゃあ、あばよ！」

そのことばは、地上までとどきませんでした。人をばかにした大笑いの声は、みんなの耳にはいりました。四十面相は、レンブラントの名画のキャンバスを、わくからはがして、ほそくまるめ、ふろしきにつつんで背中にせおっているのです。

警官たちは、じたんだをふんでくやしがりましたが、どうすることもできません。

ピストルをうとうにも、とてもあの高い空まではとどかないのです。

「しかたがない。警視庁に連絡して、こっちもヘリコプターを飛ばそう。そしてあいつを追っかけるんだ。」

中村警部は、はぎしりしながら、そんなことをつぶやきました。警視庁には、こんなときのために、二台のヘリコプターが、いつでも飛べるように用意されているのです。

中村警部は、ひとりの警官をよんで、警視庁に電話することを命じようとしたが、そのとき、ふと、みょうなことに気がつきました。

「オヤツ、あのヘリコプターには、見おぼえがあるぞ。あれは警視庁のヘリコプターじゃないか。はてな、これはいったいどうしたことだ。」

まちがいありません。たしかに目じるしがあるのです。それにしても、警視庁のヘリコ

プターが、怪人四十面相を助けにくるなんて、そんなばかなことが、あつていいものではないか。

ひよつとしたら、怪人の部下が、警視庁のヘリコプターをぬすみだして、首領を助けにきたのかもしれない。

中村警部はなにがなんだかわけがわからなくなり、ただもう、ぼんやりと空を見あげて、その場につつ立っているばかりでした。

第二のヘリコプター

怪人四十面相は、縄ばしごをのぼりきつて、操縦室の入口に両手をかけると、鉄棒のしりあがり、ひよいと中へはいりました。

「松下か？」

怪人が声をかけますと、操縦席にいた男は、縄ばしごをたぐりあげながら、

「はい！」

とこたえました。

「もうひとり、だれだ？」

「しんまいの、あつしの助手ですよ。」

松下とよばれた男は、みように、かすれた声でいきました。かれは、とりうち帽をふかくかぶり、洋服のえりをたてて、なぜか、顔をかくすようにしています。

「ふうん、こんな助手がいたのかい。子どもみたいに、ちっちゃいやつじゃないか。」

いかにも、その助手は、子どものようにせのひくい、へんな男でした。やつぱり、とりうち帽子をふかくかぶり、だぶだぶの服をきています。子どもが、おとなの服をきているようなかつこうです。

四十面相は、ちよつとふしぎそうな顔をしましたが、いまは、そんなことを考えているばあいではありません。いつこくもはやく、このばを逃げださなければならぬのです。

松下という部下は、操縦席について、きゆうにヘリコプターを上昇させ、そのまま東のほうへ進ませました。

ヘリコプターのぜんぼうには、自動車のヘッドライトのようなものがついています。操縦室の中は、うす暗いのです。電灯も、操縦機のところを照らしているばかりで、おたがいの顔も、はつきり見えないほどでした。

「松下、いきさきはわかっているな。」

四十面相が、ねんをおすようにいいました。

「どちらにしましょう。」

松下が、うつむいたまま、やつぱりかすれた声で聞きかえします。

「どちらだって？ ばかッ、きまつてるじゃないか。きめんじようだ。」

「きめんじようですか。」

「うん、きめんじようだよ。きみはなにをぼんやりしているんだ。へんだぞ。どうかしたのかッ。」

「いや、なんでもないんです。ちよつと、ほかのことを考えていたので……。」

「なにッ、ほかのことを？ おいおい、しつかりしてくれ。操縦しながら、ほかのことなんか考えるやつがあるか。ここは空の上だよ。落ちたら命がないんだぜ。」

「すみません。」

松下は、かすれた声で、しおらしくわびをいいました。

空は雲がかかってまっ暗ですが、目の下には東京の町の明かりが、美しくかがやいていました。まるで宝石をばらまいたようです。

「おいッ、松下。きみは、きようはよっぼど、どうかしているな。方角がちがうじゃないか。さっきのままでもいいんだ。どうして、もとのほうへひっかえすんだ。」

東のほうへ進んでいたヘリコプターが、いつのまにか、ぐるッとむきをかえて、西にむかって飛んでいるのです。

「かしら、だまっていてください。ヘリコプターの話は、あつしにまかしててください。気流がわるいんです。ちよつと、まわりみちをするだけです。」

やっぱり、へんてこなかすれ声です。

「きみ、その声はどうしたんだ。かぜでもひいたのか。」

「ええ、ちよつとね。なに、たいしたこたありませんよ。」

四十面相はさつきから、松下のいうことがどうもよく分かりません。それにとりうち帽子で顔をかくすようにして、下ばかりむいているのもへんです。ひよつとしたら、こいつにせものじゃないのかな、と、恐ろしいたがいが心をかすめました。

そのときです。右手のほうの空に、ひとつの光が飛んでいるのに、気がつきませんでした。星ではありません。

とすると、空を飛ぶ光といえは、飛行機かヘリコプターのほかには、ないはずで。

飛行機ではありません。どうも、こちらとおなじような、ヘリコプターらしいのです。やっぱりヘリコプターでした。こっちへ近づいてくるようです。まるい、すきとおった操縦室が見えてきました。そのなかにいる人間のすがたまで、ありありと見えてきました。そのヘリコプターはぐんぐん近づいてきます。五十メートル、三十メートル、やがて十メートルまで接近しました。

そして、こちらとおなじ方向へならんで飛んでいます。

もう、操縦士の顔がぼんやりと見えるほどです。

オヤツ、あそこにいるのは、松下じゃないか。

四十面相は、ギョツとしたように、こちらの松下のよこ顔を見つめました。ちがう、ちがう。こいつは、おれの部下の松下じゃない。あやういところを助けてくれたので、部下とばかり思っていた。部下のうちで、ヘリコプターを操縦できるやつは、松下のほかにないのだから、こいつを松下だと思いきんでいた。

だが、ちがう。こいつは松下じゃない。むこうのヘリコプターにいるのが松下だ。すると、こいつはいったい。なにものだろう？

「おいッ、きみは松下じゃないんだなッ。」

四十面相は、操縦士のわきばらをこづきながら、おしころしたような声できめつけました。

操縦士の正体

松下とよばれていた男は、はじめて顔を上にむけ、正面から四十面相をにらみつけました。

「松下でないとなると、だれだと思うね。」

「なにッ、さては、きさまッ。」

「おっと、身うごきしちやいけな。ぼくの手がくるったら、みんなおだぶつだからね。それに、きみの背中にかたいものがあたっていているのが、わかるかね。ピストルのつつ先だよ。きみのうしろに、ぼくの助手の小男こおとこがうづくまって、ピストルをつきつけているんだよ。手むかいをすれば、きみの命はないんだぜ。」

「ちきしょうッ！ きさま、いったいなにものだッ？ 敵か味方か。まさか味方じゃあないだろう。すると、さつき、屋根の上から、おれを助けてくれたのは、どういうわけだ。」

「助けたんじやあない。つかまえたんだよ。そして、いまきみを警視庁へつれていくところさ。」

「それじゃあ、きさま、警視庁のやろうかッ。」

「それでもないよ。おい、四十面相、ぼくをわすれたのかね。」

操縦士はそういって、ポケットから、あぶらをしませた手ぬぐいをだすと、それでじぶんの顔を、ぐるぐると、なでまわしました。変装のけしやうを、ふきとったのです。

「アッ、きさま、明智小五郎だなッ。」

「ウフフフフ……、やつとわかつたかね。そして、きみのうしろからピストルをつきつけているのは、ぼくの少年助手の小林だよ。おとなの服をきて、小男にばけていたのさ。」

読者諸君、ちよつと、思いだしてください。四十面相が神山邸の洋館の屋根にのぼったとき、やしきをとりにまく警官隊のなかに、明智探偵と小林少年のすがたが見えなかつたことは、まえの章に書いてあります。あれを思いだしてください。ふたりは、そのとき、警視庁のヘリコプターをかりだして、神山邸へ飛んでくるために、そつとたちさつたのです。明智探偵は、自動車はもちろん、飛行機でも、ヘリコプターでも、操縦できるうでまえをもっていました。名探偵というものは、万能選手でなければなりません。明智は青年時

代から、あらゆるスポーツでからだをきたえてきました。そして、飛行機の操縦までも、じゅうぶん練習していたのです。

「おい、四十面相。きみは、せつかく苦心をして、牢やぶりをしたかとおもうと、もう、つかまつてしまったね。こんなにはやくつかまるなんて、いつものきみにも、にあわないことじゃないか。

ハハハハハ。きみがヘリコプターを持つていることは、ちゃんとわかっていた。だから、きみが、あの西洋館の高い屋根へ逃げのぼったとき、ぼくは、すぐにヘリコプターを思いだした。そのほかに、四方をかこまれたあの屋根から、逃げる方法はないのだからね。

きみは部下とうちあわせておいて、ちようどいいじぶんに、ヘリコプターがあそこへ飛んでくるようにしておいた。そしてじぶんのヘリコプターに乗って、逃げだすつもりだった。

ぼくはそれがわかったので、小林君をつれて、警視庁にかけつけ、ふたりとも変装をして、このヘリコプターに乗りこんだ。そして、きみの部下のヘリコプターがやってくるまえに、先をこして、あの屋根の上にあらわれたのだ。

よく見れば、きみのヘリコプターと、これとはかたがちがっているのだが、水せめに

あつて、めんくらつていたきみには、その見わけがつかかなかつた。助けだしにきたからには、自分のヘリコプターだと、思いこんでしまったのだ。そして、まんまと、ぼくのわなに、かかつたというわけだよ。

あそこに飛んでいるのが、きみのヘリコプターだ。そして、あの操縦席にいるのがきみの部下の松下という男だろう。ひとあしおくれて首領をさらわれ、びっくりして、追つかけてきたのだ。だが、まさか、こつちのヘリコプターを、射撃するわけにもいくまい。首領のきみが、乗っているんだからね。

あの男は、どうしていいかわからなくなつて、ただぼくたちを、つけているのだ。いまに、自分もつかまつてしまうのも知らないでね。ハハハハ……。

それじゃあ、きみをつかまえたことを警視庁に知らせて、よろこばせることにしよう。きみも聞いていたまえ。」

明智はそういつて、操縦席のまえにある無線電話の送話機をとつて、警視庁の無電室をよびだすのでした。

「こちらは空中警邏機^{けしらぎ}第二号。報告します。神山邸洋館屋上で、怪人四十面相を逮捕、ただいま警視庁にむかつて飛行中。いまから、やく十分ののち、日比谷公園^{ひびや}の広場に着陸の

予定。着陸地点に数名の警官を配置してください。」

明智は送話機にむかって、おなじことを、二度くりかえしました。すると、むこうから、「警視庁りようかい。」

という返事が、はつきり聞こえてきました。

「四十面相、もうひとつきみに知らせておくことがある。きみはレンブラントの名画をぬすみだして、背中にしよっているつもりだろうが、それはとんだ思いちがいだよ。そのふるしきづつみをといて、よくしらべてみるがいい。」

明智にそういわれて、四十面相は、びっくりしたような顔をしました。そこで、のろのろと、ふるしきづつみをおろし、なかのキャンバスをだしてひらきました。そして、ひと目その画面を見ると、おもわず、「アッ！」と声をたてないではいられませんでした。

「ごらんなさい。それは、いつのまにか、レンブラントとはにてもにつかない、へたくそな風景画にかわっていたではありませんか。」

四十面相のあつけにとられた顔を見ると、明智探偵は、さも、こきみよさそうに、笑いだすのでした。

「ハハハハ……、おい、四十面相君。こんどはなにからなにまで、きみの負けだね。ぬす

みだした絵は、まるでちがったにせものだった。助けだされたと思ったハリコプターは、警視庁の警邏機だった。そして、それに乗っていたのは、きみがこの世で、いちばん恐れられている明智小五郎だったとは。ハハハハ……。」

暗号の光

「ワハハハハ……。」

四十面相も明智に負けないで笑いだしました。こういう悪人になると、そのくらいのことでは、なかなかへこたれないのです。

「ワハハハハハ……、明智君、さすがは名探偵だねえ。うまくやられたよ。」

だが、レンブラントの絵が、いつのまに、こんなつまらない風景画にかわったのか、おれはすこしも気がつかなかった。わくからはがしたときには、たしかにあの名画だったんだがなあ。明智君、ひとつこの手品の種あかしをしてくれないかね。」

それを聞くと、明智も笑いだして、

「きみは魔法つかいのくせに、あれがわからなかったのかい？ きみの背中にピストルを

あてているのは、おとなのオーバーを着ているけれども、じつは、ぼくの少年助手の小林なんだよ。この小林がその風景画のキャンバスのまるめたのを持って、神山さんの美術室にかくれていたのさ。本だなのうしろにね。そして、きみが石膏像をやぶってあらわれ、レインブラントの絵をわくからはがして、棒のようにまるめて、ちよっと床においたときに、本だなのかげから、手をのぼしてすりかえてしまったのだよ。小林君も、なかなか手品はうまいからね。ハハハハハ……。」

「ふうん、そうだったのか。これはいちばん、やられたね。きみのちんぴら助手も、すみにおけないよ……。とここできみは、これから、おれをどうしようというのだね。」

「わかつているじゃないか。さつき警視庁と無電で話したとおりだよ。日比谷公園の広っぱに、大ぜいの警官が待ちかまえている。そのなかへ、このヘリコプターを着陸させて、きみをひきわたすのさ。」

そんな話をしているとき、四十面相は左の手で、みょうなことをやっていました。

そつと、ポケットから小型の懐中電灯をとりだし、それを、プラスチックの操縦席のよこにむけて、明智探偵たちに気づかれないうように、ピカッ、ピカッ、ピカッと、つけたり消したりしていたのです。

そのむこうには、四十面相の部下のヘリコプターが、こちらのヘリコプターとならんで飛んでいます。もしかしたら、四十面相は、そうしてみかたのヘリコプターへ、懐中電灯の暗号通信をしていたのではないのでしょうか。

「ワハハハ……、こうなると、四十面相も、あわれなもんだね。また刑務所へくらいこむのか。だが、明智君、おれはやっぱり魔法つかいなんだぜ。きみのほうが手品をつかえば、おれのほうは魔術をつかうのさ。こうして、つかまったように見えていても、ほんとうは、つかまってやしないんだぜ。ウフフフ、まあ、いまにわかるよ。」

四十面相は負けおしみのようなことを、くどくどしやべっています。懐中電灯の通信をごまかすためかもしれませぬ。

まもなく、いままでならんで飛んでいた、むこうのヘリコプターが、だんだん遠ざかっていき、やがて、うしろのほうへ飛びさってしまいました。

それからしばらくすると、こちらのヘリコプターは、日比谷公園の上に近づいています。た。

広っぱには、高いはしらの上に照明灯がつけられ、その光のなかに、十数名の制服のおまわりさんが、大きな円をえがいて立ちならんでいました。

そのうしろに、むらがつているせびろ服の人たちは、きつと新聞記者なのでしよう。写真機をさげている人もまじっています。警視庁づめの記者たちが、四十面相がつかまったときいて、おまわりさんのあとから、かけつけてきたのでしよう。

明智の操縦するヘリコプターは、その広っぱのままでくると、しずかに下へおりはじめました。地面に近づくにしがって、広っぱのようすがはっきり見えてきました。

むらがつているのは新聞記者ばかりではないようです。もう十二時をすぎた夜ふけですが、どこからともなく、やじうまが集まってきて、そのかすが、だんだんふえてくるのでした。

おまわりさんは、ヘリコプター着陸のための、広い場所をあけておかなければなりませんので、まんなかへ出てこようとするとする人たちを、とめるのにやつきとなつていようです。なかなかヘリコプターを着陸させることができません。広っぱの上空で五分ほどもてまどつてしまいました。

やがて、明智探偵は、ヘリコプターを、ゆっくりと下降させました。地面に近づくと、あらしのようなプロペラの風が吹きまくり、おそろしい砂ぼこりがたちます。むらがつている人々は、目をおさえて、広っぱのすみのほうへ逃げだしました。

それで、やっと地面がひろくなつたので、明智はヘリコプターを着陸させることができましたが、すると、逃げだしていたやじうまが、新聞記者たちといっしょに、ドツとおしよせてきて、たちまち操縦席のまわりは、黒山の人だかりになってしまいました。

すりの源げんこう

ヘリコプターの操縦席のドアがひらかれ、待ちかまえていたおまわりさんが、そこへ近づくと、いきなり四十面相の手をとって、そとへひきずりおろしました。そして、手錠をはめようとしたときです。そのときまで、おとなしくしていた四十面相が、おそろしいきおいで、おまわりさんの手をふりきって、いきなり、パツとうしろの群集の中へおどりこんだではありませんか。

「アッ！」とおどろいた警官たちが、そのほうへ、とびかかっていきました。

さいわい、四十面相がとびこんだのは、新聞記者たちの中でした。

「ちくしょう。逃がすものか。警官、ここにいますよ。早くつかまえてください。」

記者たちが、くちぐちにわめきながら、黒シャツすがたの四十面相を、前のほうへおし

だしてくれました。

手錠をもった警官が、それにとびついて行って、かちんと両手にはめてしまいました。もうこんどは、逃げられません。十数名の警官にとりまかれて、四十面相はおとなしく、すぐむこうの警視庁のほうへ、ひたたてられていくのでした。

まもなく四十面相は、警視庁の地下のしらべ室へ、つれこまれていました。正面には、捜査一課の係長のひとりである中村警部が、げんぜんと、いすにかけています。

中村警部は四十面相のために、たびたび出しぬかれていますので、うらみかきなる相手です。

「こんどこそは、もう逃がさないぞと、恐ろしい目でらみつけていました。

そのよこに、明智探偵と小林少年が、ひかえていました。四十面相は、ふたりの警官にまもられて、その前に、しよんぼりと立っているのです。

「おい、四十面相、本名は遠藤平吉えんどうへいきちだな。きみは、せつかく脱獄したかと思ったら、もうつかまってしまったじゃないか。すこし、おいぼれたようだな。」

中村警部が、きみよさそうにいました。

「エツ、四十面相？ ……遠藤平吉？」

黒シャツの怪人は、ぼんやりした顔でふしぎそうにつぶやきました。

なんだかへんです。小林少年は、はやくも、それに気づいて、明智探偵のひざをつつきました。そして、

「あいつ、どつか、顔がちがいますよ。ヘリコプターに乗っていたやつと、顔がちがってますよ。」とささやくのでした。

中村警部は、いまはじめて、近くで顔を見るのですから、そこまでは気がつきません。

「おい、遠藤、はつきり返事をしないか。きみは四十面相と名のる男だね。」
はげしくどなりつけますと、男は、きよんとして、

「エツ、とんでもない。あつしや、そんなものじゃありませんよ。ひどいめにあつたんです。日比谷の林の中で、三人の男につかまって、こんなものを着せられちまつたんです。そして、むりやり、広っぱの人ごみの中へつれこまれ、おまわりさんの前へ、つき出されたんです。なにがなんだか、さっぱりわけがわかりませんや。」

黒シャツの男は、ふへいらしく、つぶやくのでした。

なんだか、ようすがおかしいのです。口のききかたも、四十面相とはまるでちがっていません。

「そんなことをいってごまかそうとしたってその手にはのらないぞ。きさまが四十面相じゃないとでもいうのかッ。」

「アッ、そうだ。これを見ておくんない。その三人のやつが、しらべ室へいったら、これを見せるがいいといって、こんなものを……。」

男はそういって、黒シャツのポケットから、一まいの紙きれをとりだして、中村警部の前にさしだします。

うけとつてみますと、その紙きれには、えんぴつで、こんなことが書いてありました。

こいつはすりの源こうです。四十面相の身がわりには、すこしやすっぽいけれども。ともかく、すりをひとりつかまえてあげたんだから、まあ、がまんしてください。それじゃ、あばよ。

四十面相より

警視庁どの

中村警部はそれを読むと、恐ろしい顔になって、黒シャツの男をにらみつけました。

「おまえ、源こうつていうのかッ。」

「へえ、あつしや、源こうですよ。」

男はへいきな顔で、すましています。

中村警部は、そばにいた警官に、なにか耳うちしました。すると、警官はすぐに、部屋のそとへでていきましたが、まもなくひとりの背広の人をつれてかえってきました。それは、すり係の刑事だったのです。

刑事は、部屋にはいつて、黒シャツの男を一目見ると、

「アツ、おまえ、源こうだなツ。またやったのか。いったい、なんど、くらいこめばいいのだ。」

と、しかるようにいいました。そして、中村警部のほうにむきなおり、

「係長、こいつは前科七犯の有名なやつです。源こうにちがいありません。」
と、きっぱりいいきるのでした。

ああ、四十面相は、やっぱり魔法つかいでした。ヘリコプターの中にいたのは、まちがいのない四十面相でしたが、それがいつのまに、こんなすりに入れかわってしまったのでしょうか。

明智探偵は、ちよつと、首をかしげて考えていましたが、すぐに魔法の種に気づきました。

「中村君、わかったよ。さつき四十面相がヘリコプターから、ひきずりおろされたとき、

警官の手をふりきって、新聞記者のかたまっている中へ逃げこんだ。すると、記者の人たちが、こいつをとらえて、つきだしてくれたんだが、その瞬間に、人間の入れかえがおこなわれたんだ。

つまり、あの新聞記者たちは、にせもので、四十面相の部下が化けていたんだ。そして、まえもつてこの源こうというすりをつかまえておいて、四十面相の身がわりにたてたのだ。顔がどこかにているし、あのさわぎのなかだから、警官たちも気づかなかつたのだよ。なにしろ、四十面相とおなじ黒シャツがただだからね。この源こうに黒シャツを着せておいて、とつきに、人間のすりかえをやったのだよ。」

それにしても、四十面相の部下は、ヘリコプターが日比谷公園につくことを、どうして知っていたのでしょうか。明智探偵はそこまでは気づきませんでした。読者諸君はごぞんじです。それは、空を飛んでいるとき、四十面相の部下のヘリコプターが、こちらとならんで飛んでいました。それにむかつて、四十面相は懐中電灯の信号を、おくれたのです。たぶん、モールス信号だったのでしょうか。

四十面相の部下のヘリコプターは、その通信をうけると、すぐにどこかへ着陸して、電話で、なかまにこのことを知らせ、日比谷へさきまわりしているように、はからつたのに

ちがいありません。

明智は、さらに説明をつけくわえました。

「あの黒山の人だからだから、ほんものの四十面相は、どこかへ身をかくしてしまっただ。記者にばけた部下たちが、オーバーかマントを用意していて、四十面相の黒シャツの上から着せてしまえば、夜のことだから、もうわかりっこないのだからね。」

「アツ、そうかつ。おい、新聞記者をよんできたまえ。みんなよんでくるんだ。」

中村警部がどなりました。ひとりの警官がとびだしていったかとおもうと、ぞろぞろと大ぜいの新聞記者が、しらべ室へはいつてきました。

「公園のヘリコプターのそばで、この男をつきだして、警官にわたしてくれた人はいませんか。」

警部がたずねますと、記者たちは、たがいに顔を見あわせていましたが、その中のひとりがかたえました。

「いや、あれは新聞社のものじゃありませんよ。だれだかわからないが、ぼくたちのあいだに、六、七人、へんなやつがまじっていたのです。その連中が、こいつをつきだしたのです。」

「ふうん、ちゃんと用意をしていたんだな。それで、ほんものの四十面相が、どこへ逃げたか、きみたち気づきませんでしたか。」

警部がききますと、記者たちはびつくりして、

「エツ、じゃあ、こいつは四十面相じゃないのですか。」

「うん、すっかり黒^{くろ}星^{ぼし}で、もうしわけないが、やられたんだ。あいつらは、この源こうというすりに、黒シャツを着せて、上からオーバーかなにかはおらせて、あそこへつれてきていたんだね。そして、とつさに人間のすりかえをやったんだ。」

中村警部は、すこし、めんぼくないような顔で説明しました。

なるほど、警視庁としては、大失策^{だいしつさく}にちがいありません。しかし、明智探偵と小林少年は、それほど失望しているようにも見えないのはなぜでしょう……。ふたりは、まだあきらめていなかったからです。四十面相のほうに、奥の手があれば、こちらにも、ちゃんと、もうひとつ奥の手が用意してあったからです。

ポケット小僧

お話は、すこし前にもどつて、ヘリコプターが、日比谷公園の広っぱに着陸したところからはじまります。

ヘリコプターのまわりに集まっている新聞記者や、やじうまの中に、三人の小さな子どもがまじっていました。

三人とも、浮浪少年ふうろうのような、きたないなりをしていましたが、その中に、まるで幼稚園の生徒のような、小さい少年がいました。

この三人は、小林少年の命令で、ここへやってきた、チンピラ隊の少年たちでした。いちばん小さい少年は、ポケット小僧と呼ばれているチンピラ隊員です。

この三少年は、ばらばらにはなれて、大ぜいのおとなのあいだを、りすのようにくぐりぬけて、ぬけめなく見はりをしていました。小林団長から、四十面相を見はつていて、なにかあやしいことがあったら、知らせるようにと、いつつけられていたのです。

四十面相をとらえたら、日比谷公園の広っぱまでつれてくることは、ヘリコプターに乗るまえからきまつていたので、小林君は、あらかじめチンピラ隊に連絡して、はやくから公園へきているようにさしずしておきました。チンピラたちは、ひまなからだですから、いくらながく待っていても、へいきなのです。

三人のチンピラの中でも、いちばんすばしっこくて、頭のはたらくのはポケット小僧です。かれは、からだが小さいので、おとなのまたのあいだを、くぐって歩くことができます。

「おや、だれだツ、ぼくのまたのあいだをくぐったやつは？」

びつくりして見まわしても、ポケット小僧は、もうとつくに人ごみの中へすがたをかくしているのです。

そうして、あちこちとくぐり歩いているうちに、ポケット小僧は、へんな男を見つけました。

その男はとりうち帽をまぶかにかぶり、大きなオーバーを着て、四、五人の新聞記者のような人たちにとりかこまれていましたが、ポケット小僧は、その人のまたのあいだをくぐったときに、へんなことを見てしまったのです。

その男はズボンをはかないで、ぴつたり足にくつついた、まっ黒なズボンしたのようなものをはいていました。まるでサーカスの曲芸師きよくげいしのようです。

「へんなやつがいるな。」

と思つたので、ポケット小僧は、その男のそばをはなれないようにして、気をつけていま

したが、すると、ヘリコプターから四十面相がひきおろされ、あのさわぎがはじまったのです。

黒シャツの四十面相は、警官の手をふりきって、こちらの人ごみの中へ、とびこんできました。

それから、じつに、ふしぎなことが、はじまったのです。

新聞記者らしい四、五人の男が、かけこんでくる四十面相の手をとって、あのあやしいオーバーの男のそばへひきよせました。そして、手ばやく男のオーバーをぬがせると、それを四十面相に着せてしまいました。とりうち帽もとって、四十面相にかぶせたのです。

オーバーと、とりうち帽をとられた男は、四十面相とそっくりのすがたをしていました。黒シャツに黒ズボンでした。顔もどこかにていのです。

新聞記者のような人たちは、そのへんな男を、人ごみの前のほうへつきだしながら、くちぐちに叫ぶのでした。

「こいつだ、こいつだ。こいつが、いま、人ごみの中へ、かくれようとしたんだ。」
そして、その男を、警官たちにひきわたしたのです。

顔もにているし、服装がまったくおなじなので、警官たちは、かえだまとは気づかず、

その男に手錠をはめて、むこうへつれていってしまいました。

四十面相がつれていかれたので、新聞記者や、ものずきなやじうまは、あとから、ぞろぞろついていきましたが、大部分はそのまま、公園のそとへひきあげていき、あたりは、すっかりさびしくなってきました。

オーバーにとりうち帽の四十面相は、すばやく公園のすみのほうへ走って行って、こんもりとしげった林の中へ、すがたをかくしました。

ポケット小僧は見うしなつてはたいへんだと、こっそり、そのあとをつけました。小さな子どもですから、べつにあやしまれることもありません。そのうえ、小僧は尾行の名人ですから、まだそのへんにいたおとなたちに、さとられるようなへまはやりません。

このことを明智先生や小林少年に知らせたいのですが、そのひまはなかったのです。四十面相はヘリコプターのはんたいのほうへ逃げたので、あとにもどって知らせていたら、見うしなつてしまうかもしれないのです。なかまのチンピラがそばにいたら、知らせてくれるようにたのむこともできたでしょうが、ふたりのチンピラは、どこへいったのか、すがたが見えません。

ふしぎな変装

四十面相がかくれたしげみの中には、大きな四角なかばんがかくしてありました。部下にめいじて、そこへ持ってこさせておいた変装用のかばんなのです。

四十面相は懐中電灯をつけて、そのかばんをひらきました。洋服やシャツなどが、いっぱいつまっています。かれは、かばんのふたのうらについているポケットに手を入れて、小さな鏡かがみと箱をとりだしました。その箱の中には、顔をかえる絵のぐや、つけひげや、いろいろなものが入っているのです。

かれは、かばんのふたをしめ、その上に鏡を立てて、懐中電灯でじぶんの顔をてらしながら、変装のおけしようをはじめました。

そこは深い木のしげみにかこまれていて、懐中電灯の光がそとへもれる心配はありません。

もう、夜の十二時をすぎています。さつきまで広っぱに集まっていた、やじうまたちも帰ってしまって、公園の中には、人っこひとりいなくなっていました。新聞記者にばけていた四十面相の部下たちも、どこへいったのかすがたが見えません。

四十面相は、ゆうゆうとして変装をやっています。じつにおちつきはらったものです。それにしても、かれはなぜこんな公園の中などで、変装をはじめたのでしょうか。オーバーの下から黒いズボンしたのあらわれているこのままのすがたで町にできれば、いくら夜なかでも人にあやしまれますが、それなら部下に自動車を用意させて、それに乗って逃げてしまえばいいのです。

そうしないで、こんなふじゆうな場所で変装をはじめたのには、なにかわけがあるのかもしれません。

四十面相は、だれも見えていないと安心していましたが、じつは、ひとりの小さな少年が、しげみのむこうがわにはいつて、木の葉のすきまから、じつと中をのぞいていました。

この少年は、少年探偵団のなかまのチンピラ隊にぞくするポケット小僧なのです。からだがひどく小さくて、ポケットにでもはいるくらいだというので、そんなあだ名がついていましたが、すばしっこくて、たいへんりこうな少年でした。

まえに書いたとおり、このポケット小僧は、四十面相がにせものと入れかわったの気づいて、ほんもののほうのあとをつけて、このしげみへやってきたのです。

ポケット小僧は、しげみのそとに寝そべって、相手に気づかれぬように、じつと中のよ

うすをうかがっていました。

いくえにもかさなりあつた木の葉のすきまからのぞいているのですから、よくは見えませんが、それでも、四十面相が懐中電灯の光で、顔に絵のぐをぬっていることはわかりました。

なにしろ、四十の顔をもつといわれる変装の大人です。その手ばやいこと……。たちまち顔をしあげて、こんどはかばんの中から黒い服をとりだすと、それを黒シャツの上から着こみ、バンドをしめ、肩からなにかさげて、帽子をかぶり、靴をはきました。

変装がおわると、いままで着ていたオーバーをかばんに入れ、ふたをしめて、そのかばんを手にはぎ、木のしげみからでてきました。

ポケット小僧は相手に見つからぬよう、すばやくしげみのはんたいがわにかくれましたが、見ると、そこにあらわれたのは、ひとりの警官でした。四十面相は警官に化けたのです。

ああ、なんとというまい変装でしょう。警官の制服に制帽、肩から革ひもで、ピストルのサックをさげているようすは、だれが見てもほんもののおまわりさんです。

ポケット小僧はその顔を見て、びっくりしてしまいました。さっきまでの四十面相と、

まるでちがつていたからです。四十面相が変装したのではなくて、ほんとうのおまわりさんが、どこからかやってきたとしか思われません。

四十面相が、四十の顔をもつといわれるほどの変装の名人だということは、聞いていましたが、これほどの名人とは知りませんでした。ほんとうに魔法つかいです。

かばんをさげた四十面相のおまわりさんは、しゃんと胸をはって大またに歩いていきました。ポケット小僧はさとられないように気をつけながら、ちよこちよこ、そのあとをつけていきます。

おまわりさんは、公園をでると、すぐそばにある警視庁のほうへ進んでいきました。警視庁といえ、四十面相にとつては、いちばん恐ろしいところですよ。その恐ろしいところへ、へいきで近づいていくのです。

やがて、警視庁の入口のところまできました。入口のひろい石段に、警官が立っています。そのまえには警察用の自動車がたくさんならんでいて、夜なかでも、警官たちが、いったりきたりしています。

四十面相のにせ警官は、その石段のまえまでいくと、なにを思ったのか、石段をのぼりはじめました。ああ、四十面相は気でもちがったのでしょうか。「さあ、つかまえてくだ

さい。」といわぬばかりに、警視庁の中へはいつていこうとしていたのです。

ポケット小僧は、あきれかえって、そのうしろすがたをながめていました。どろぼうが警官にばけて、警視庁へはいつていくのです。こんなばかなことがあるものでしょうか。

にせ警官は、石段に立っている警官に、かた手をあげてあいさつすると、そのまま玄関のなかへはいつていきます。

ほんものの警官は、すこしもあやしません、おなじように手をあげてあいさつをかえしました。

警視庁へは、一日に何千という警官が出入りするのですから、みんながおなじみというわけではありません。制服さえ着ていれば、じぶんたちのなかまだと思うのもむりはないのです。

にせ警官は、大かばんをさげていましたが、犯罪事件の証拠品として、そういうものを持つてくる警官はよくあるのですから、これもうたがわれる心配はありません。にせ警官のすがたが玄関の中へ見えなくなってしまったとき、ポケット小僧は、大いそぎで石段をかけあがり、そこに立っている警官によびかけました。

「おまわりさん、いまのやつをつかまえて。大きなかばんをさげていたやつだよ。あれは

四十面相だよ。おれ、あいつが変装するところを見ちゃったんだ。はやくあいつをつかまえなけりや……。」「

警官はびつくりしてこちらを見ましたが、きたないふうをした浮浪児のような子どもなので、手をふりながら、あつちへいけというあいずをするばかりで、いつこうとりあつてくれません。

「おまわりさん、ほんとうだよ。はやくしないと、あいつ、逃げちやうじやないか。おじさんは四十面相じゃないのかい？ おつそろしい大どろぼうだぜ。」

ポケット小僧は、警官の手にすがりついて、一生懸命に叫びました。

「こら、あつちへいくんだ。ここは、おまえたちのくるところじやない。ちんぴらのくせに、警官をからかうなんて、けしからんやつだ。」

警官が、つかまれている手をいきおいよくふりきったものですから、ポケット小僧は、石段の上に、ころがってしまいました。

「アツ、いたい。おじさん、なにをするんだい！」

やっとおきあがって、おしりをさすりながら、

「子どもだとおもって、ばかにしてるんだな。そうじやないよ、からかつてるんじやない

よ。ほんとうだよ。あいつ四十面相だよ。はやく……はやくしないと、逃げちゃうよ。」
「くだいやつだな。あっちへいけというのに。」

警官は、よこをむいて、しらぬふりをしようと思いました。

「アーツ、そうだ。ここに明智先生がきているだろう。名探偵の明智小五郎先生だよ。おれ、あの先生のでしなんだよ。チンピラ隊っていう子ども探偵団だ。明智先生にそういつてくれよ。そうすれば、おれがうそをいつてないことが、わかるんだから。」

そこへ、玄関のほうから、警部補の制服を着た警官がおりてきました。が、ポケット小僧のわめき声をきくと、そばによつてきて、「どうしたんだ。」とたずねました。

ポケット小僧は、このひとなら話がわかるかもしれないと思ったので、さつきからいつていることを、もういちどくりかえしました。

「明智さんなら、しらべ室におられるはずだ。知らせてあげるほうがいいね。この子どもということが、もしほんとうだったら、たいへんだからね。きみ、しらべ室をさがしてみたまえ。捜査一課の中村係長さんといっしょのはずだよ。」

上役に命令されたので、警官はしかたなく石段をかけあがって、玄関へはいつていきました。

しばらくすると、警官は小林少年をつれてもどってきました。小林君は、明智探偵といっしょにしらべ室にいたのです。

「アツ、小林さん！」

「アツ、ポケット小僧！」

顔を見あわせるとふたりが、いっしょに叫びました。

「これは探偵のしごとを手つだつてくれるチンピラ隊の子どもです。りこうな子ですから、この子のいうことは、まちがいありません。」

小林少年は、明智探偵の助手として、警視庁でもよく知られていました。その小林君がそういうのですから、もうすててはおけません。

そこへ、明智探偵や中村警部もかけつけてきて、ポケット小僧からことしのしだいを聞きとると、にわかには警視庁内の大捜索がはじまりました。

警視庁には何百という部屋があるのですが、夜なかにつめている警官のかずもおおいので、たいへんです。

まもなく、ぜんぶの部屋の捜索がおわりました。しかし、あやしい警官は、どこにもいないのです。

とつくに、裏口から、逃げさつたのかもしれない。それなら、はじめから警視庁へは
いらないうで、逃げてしまえばよさそうなものではありませんか。

「いったい、四十面相のにせ警官は、なんのために警視庁へはいったのでしょうか。いよいよ、わけがわからなくなってきました。」

警視総監そうかん

その夜は、四十面相がつかまって、ヘリコプターではこぼれてくるというので、捜査一課長の堀ほりぐち口警視も、課長室につめていましたが、庁内の捜索がおわってしばらくすると、ひとりの警官が、課長室へはいつてきて、拳手きよしゆの礼をしました。

「課長、総監が呼びです。」

「え、総監が？　総監室にきておられるのか。」

「四十面相のことをきかれて、いま公舎こうしゃからおいでになったところです。」

「そうか。すぐいく。」

「課長、それから、中村係長もいっしょにくるようにとのことでした。呼んでまいりまし

ようか。」

「うん、呼んでくれたまえ。ぼくはさきにいつているから。」

堀口捜査一課長が、警視総監の部屋へはいると、まもなく中村係長もそこへやってきました。

総監室は、りっぱな広い部屋です。まんやかに大きな机がおいてあって、そのむこうに背広すがたの山本警視総監が、ゆつたりと、こしかけていました。夜なかのことですから、秘書官もつれていないのです。

「や、ごくろうですね。四十面相のさわぎを聞いて、心配だから、わたしも、ちよつときてみました。くわしいことは、まだ聞いていないが、このさわぎは、どうしたことだね。」

総監にたずねられたので、堀口課長は、今夜のできごとを、かいつまんで報告しました。「ふうん、すると、また、あいつにしてやられたわけだね。明智君が、ヘリコプターでつれてきたまでは、おおできだが、それからあとがいけない。いくら変装の名人だからといって、にせものをつかまされたり、警官にばけて庁内にはいりこまれたりしたのは、警視庁の名おれだ。しつかりしてくれなくちやこまりますね。これはいつたい、だれの責任なんだね。」

「わたしの責任です。わたしの部下が、あやまちをしでかしたのですから。」

堀口課長が、もうしわけなさそうに答えました。

「いや、責任はわたしにあります。わたしが、この事件のかなりなのですから。」

中村係長も、青ざめた顔でおわびをいって、うなだれてしまいました。

「たったひとりの四十面相が、警視庁の手におえないとあっては、都民にもうしわけがない。これからは、しっかりとやってくれたまえ。それにしても、四十面相というやつは恐ろしい怪物だね。われわれは、やつのおもちゃにされているようなもんだ。」

ところで、わたしは、さつき、この事件について、ひとつの案を思いついたのだがね。

じつは、その案をわたすために、こうして出かけてきたのだ。これだ。ここにわたしの案というのを書きつけておいたから、あとで読んでくれたまえ。」

山本総監は、そういって、ポケットから封筒をとりだし、机ごしに堀口課長に手わたしました。その封筒のなかに総監の案を書いた紙がはいっているのです。

「今夜、よく読んでくれたまえ。その案についての諸君の意見は、あすのあさ聞くことにしよう。では、わたしは、これで帰るから。」

総監はいすから立ちあがって、ゆつたりとドアのほうへ歩いていきます。堀口課長と中

村係長は、それを見おくるためにあとにしたがいました。

廊下に出て、しばらくいきますと、むこうから、あわただしくかけてくるすがたがありました。明智小五郎と小林少年です。

明智は警視總監の前までくると、とおせんぼうをするように、立ちはだかりました。

「アツ、明智君！」

總監は、おどろいて立ちどまります。

「總監、ちよつとお話があります。」

「え、わたしにかね。」

「そうです。きゆうにお話ししなければならないことができたのです。」

「ながい話なら、部屋にもどるが……。」

「いや、ここでけつこうです。總監、ふしぎなことがおこりました。警視總監がふたりになつたのです。」

「え、なんだつて？ きみがなにをいつているのか、わたしにはよくわからないが……。」

「ぼくにも、さっぱりわかりません。じつは、いま總監の公舎へ電話をかけて、たずねたのです。すると、山本總監は、公舎の寝室でよく眠っておられるということでした。いつ

たい、これはどうしたわけでしょうか。」

「そ、そんなばかなことが……。」

「いや、ぼくは、それだけでは信用できないので、総監をおこしてもらって、電話口に出してもらいました。ぼくは、いま総監と話してきたばかりです。」

「ば、ばかなッ。でたらめもいかげんにしたまえ！」

山本総監は、まっ赤な顔になつてどなりつけました。

「でたらめではありません。あなたにはおわかりになっているはずです。」

「わたしに、なにがわかっているというのだ。」

「ふたりの総監のうちひとりには、にせものだということがです。」

「にせものだつて？」

「そうです。あなたが、にせものなのです。ぼくは、さつきから四十面相が、なぜ、警官にばけて警視庁にはいりこんだかということを考えていました。すると、あなたが、このま夜なかに、ひよっこりと総監室にあらわれて、堀口課長や中村係長を呼びつけました。

ぼくは、こいつはおかしいぞと思つたのです。四十面相というやつは、とっぴなことをやって、世間をアツとおどろかせるのが、だいすきです。じぶんの力を見せびらかしたいの

です。物をぬすむのにも、いついつかの何時にぬすむという予告をして、じゆうぶん用心させておいてぬすむのがすきです。これも世間をアツといわせたいからです。それに、警視庁は、四十面相にとつてはにきいかたきです。そのかたきを、アツといわせてやったら、どんなにゆかいでしょう。四十面相はきつと、そう考えたと思います。

四十面相が警官に化けただけでも、世間はアツといえます。それが、警視総監に化けたらどうでしょう。大どろぼうが警視総監にばけるなんて、じつにすばらしい思いつきではありませんか。」

明智はそこまでいって、じつと相手の顔を見つめました。

「それじゃ、きみは、わたしが四十面相だというのか。」

「そうだ。きみは四十面相だツ！ ついちかごろ、警視総監の背広が一着ぬすまれている。それはきみが、部下にぬすませたのだ。そして、その背広を警官の服といっしょに、あの大かばんに入れさせておいたのだ。きみは警官に化けてここへやってきた。そして、どこかのあき部屋で、その背広と着かえ、総監になりすまして、総監室へはいったのだ。」

ああ、なんとということでしょう。世間に知れわたっている警視総監と、そっくりの顔に化けるなんて、四十の顔をもつ、変装の名人でなくてはできないことです。

それにしても、明智に見やぶられた四十面相は、ここで、どんな手をうつのでしょうか。

まぼろし警官隊

総監に化けた四十面相は、おどろいて逃げだしたでしょうか？ いや、逃げようとしても逃げられるものではありません。ここは警視庁の建物のまんなかなのです。かれは、ふてぶてしく笑いました。

「さすがは名探偵、よく見やぶった。だが、おれが四十面相だったら、どうしようというのだね。」

とおちつきはらっています。

「むろん、ひつとらえるのさ。手をあげろ！」

明智のことばといっしょに、よこにいた中村警部が、サツとピストルをかまえました。警部は背広を着ていましたが、まんいちの用意に、ポケットにピストルをしのばせていたのです。

捜査一課長は、いま出てきたばかりの総監室へかけこんで、部下のところへ電話をかけ

ました。四十面相をとらえるために、警官隊をよこすようにめいじたのです。四十面相は両手をあげて、立ちおうじょうをしています。さすがの怪盗も、ピストルをつきつけられではどうすることもできません。そのとき、廊下のむこうからどやどやとおおぜいの制服警官がかけつけてきました。十人あまりの人数です。そして、四十面相のまわりをかこんで、ねじふせようとしました。

警官がとりかこんだので、中村警部はピストルがうてなくなりました。うてば、みかたの警官をきずつけるからです。

それがいけなかつたのです。そのすきを見て、四十面相は、すばやく、じぶんのピストルを、ポケットからとりだし、いきなり、天井にむけてうちました。

がらがらツとガラスのわれる音。たまは天井の電灯にあたって、ガラスがわれ、電灯は消えてしまいました。でも廊下にはいくつも電灯がついていますから、まだまっ暗ではありません。

それから、恐ろしいたたかいはじまりました。相手がピストルをうったので、警官たちもみなピストルを手にしました。

ばん、ばん、ばんと、つづけぎまのピストルの音。四十面相がうったのか、警官たちが

うったのか、よくわかりません。しかし、音がするたびに、廊下の電灯が、つきつきとうちこわされ、あたりはまっ暗になってしまいました。

「うぬツ、つかまえたぞツ。おい、手をかしてくれ。手錠だ、手錠だツ！」

「なにを、これでもかツ！」

ぱしツとなぐりつける音。二、三人のからだは廊下どころがって、くんずほぐれつ、とつくみあう音。

「アツ、逃げたぞツ。追っかける！」

「ちくしよう、逃がすものか。つかまえたぞツ。ここだ、ここだ。」

警官たちは、四十面相ともつれあつて、だんだん、廊下のむこうへ遠ざかっていきます。捜査一課長と中村警部は、物音をたよりに、それを追つていきましたが、廊下の電灯がみんな消えてしまっているので、なにがなんだかまるでようすがわかりません。

やっと、廊下のまがりかどまでたどりつきましたが、そこからさきの廊下もまっ暗です。たちどまつて耳をすますと、ふしぎなことに、あたりはしいんとしずまりかえつていきます。いままであんなにさわいでいた警官たちは、どこへいったのか、そのへんには人のけはいもないのです。

そこへ、小林少年が懐中電灯を持ってかけつけてきました。その電灯で、廊下のさきのほうを照らしてみましたが、そこには、だれもないことがわかりました。

十余人の警官隊は、四十面相といっしよに、まぼろしのようになすすえうせてしまったのです。

まがった廊下は一本道で、ほかにいくことはできません。どこかの部屋にはいったのかと、そのへんのドアを、ひとつひとつあけて、懐中電灯でしらべてみましたが、どの部屋も、まったく、からっぽなのです。

「アツ、しまった!」

闇のなかから、明智探偵の声が聞こえたかとおもうと、明智らしい人かげが、廊下のむこうへ、とぶように走っていくではありませんか。

捜査一課長や、中村警部には、なにがしまったのか、なぜ、明智探偵が走っていったのか、わけがわかりません。しかし、そこにつつ立っているわけにもいきませんので、明智のあとを追って、廊下のむこうへ歩いていきました。

また、廊下をひとまがりしますと、むこうに電灯がついているので、あたりが見わけられるようになりました。

見ると、明智探偵が、こちらへ歩いてきます。

「明智君、どうしたんだ。」

中村警部がたずねますと、名探偵はがっかりしたような声で答えました。

「またやられた。あいつが、そこまで用意していようとは思わなかった。」

「エツ、すると、いまの警官たちは？」

「うん、みんな四十面相の部下だったのさ。」

新聞記者に化けたやつらが、警官の服を着たのかもしれない。それとも、べつの部下が、どこかにかくれていたのかもしれない。いずれにしても、にせ総監がつかまったら、かけつけてくる手はずになっていたのだ。そして、四十面相をつかまえるように見せかけて、じつは、助けだしてしまったのだ。廊下の電灯がわれたのも、それだまではなくて、暗くするために、かたっぱしから電灯をねらいうちにしたのでよ。」

その廊下のはずれは、警視庁の裏門のところへ出ていきました。かれらは、裏門からまっ暗な道路へ逃げだしてしまつたのにちがいありません。

「ぼくは、裏口にいた警官たちにすぐ手配をして、追っかけるようにたのんでおいたが、あいつらは、門をでたら、ばらばらにわかれて、四方にちらばってしまっただろうから、

とてもつかまるまい。ことに四十面相は、あんな変装の名人だから、またたくまにべつの人間に化けてしまったかもしれない。」

ああ、なんとということでしょう。大どろぼうが警視總監に化けたばかりか、その部下たちも警官に化けて、にせ總監をすくいだすなんて、じつに思いもよらないはなれわざです。さすがの明智探偵も、そこまでは考えていませんでした。

四人が、ぼんやり顔を見あわせていますと、うしろのほうから、おおぜいのくつ音がして、八、九人の警官がぞろぞろとあらわれました。

課長の電話で、總監室の前につけた警官たちです。かれらがかけつけたときには、にせ警官隊は、廊下をまがってしまつたあとだったのです。

電灯が消えているので、なにがなんだかわけがわからず、まごまごしているうちに、時間がたつて、やつといまごろ、ここへやってきたのです。

中村警部は、じぶんたちも失敗したのですから、部下をしかるわけにもいかず、ともかくも、にせ總監のあとを追つかけるように命令するのです。

かばんの中

お話は、すこしまえにもどります。

明智探偵が総監の公舎へ電話をかけ、警視庁にあらわれた総監が、にせものだということとをたしかめるまでは、明智のそばに、小林少年とポケット小僧がついていきましたが、それから明智と小林少年とが、総監室へいそいでいくのを見おくって、ポケット小僧だけは、べつのほうへ歩きだしました。ポケット小僧は、こんなふう考えたのです。

「四十面相が警視総監に化けたとすると、その変装用の服は、あのかばんの中にはいつていたにちがいない。あいつは、どこかのあき部屋へかくれて、あのかばんの中から、総監の服をだして着かえ、顔をかえてから総監室へあらわれたのだ。

それなら、あのかばんが、どこかにおいてあるにちがいない。そのまますてていくかもしれないが、ひよっとしたら、あれを四十面相のすみ家へ持ってかえるかもしれない。

かばんの中のを、みんなとりだせば、からだの小さいおれは、あの中へかくれられる。そして、四十面相のすみ家をつきとめることができるじゃないか。

よし、やってみよう。見つかったら見つかったときのことだ。まさか、殺されやしないだろう。」

ポケット小僧は、かしこくも、そう考えると、あき部屋からあき部屋へと、かばんをさがして歩きました。

そして、十いくつめの部屋で、とうとうそれを見つけたのです。

「さてよ。このままかばんの中にはいつて、ふたをしめたら、息がつまってしまふ。かばんの皮に、小さな穴をたくさんあけておかなけりやあ。」

そこで、ポケット小僧は、べつの部屋から、紙をとじるきりをさがしだしてきて、それを持ってかばんのある部屋にはいり、ぴったりドアをしめて、しごとにかかりました。

まず、かばんの中のをすつかりとりだして、その部屋の戸だなの中にかくし、それから、かばんの皮の目だたない場所へ、きりをさして五十ほどの穴をあけました。

そのしごとは、十分ほどでおわりましたので、すぐからだをまるくして、かばんの中によこになり、自分でふたをしめました。すると、ふたについているばねじかけの金具かなぐが、ばちんとしまつて、もう中からはひらかぬようになってしまいました。

ポケット小僧は、浮浪少年あがりのチンピラ隊員ですから、苦しいことにはなれています。からだをまるめて、長いあいだ、じつとしていたことなんか、へいきなのです。

穴をあけたおかげで、息はらくにできます。また、その穴から、そとの物音も聞こえる

ので、たいへん便利です。

するとまもなく、しずかにドアのひらく音がして、なにものかが、しのび足で部屋の中へはいってきました。

そして、かすかな足音が、すぐそばに近づいたかとおもうと、ポケット小僧のからだだが、ぐらツとひっくりかえりました。だれかが、かばんを持ちあげたのです。

「おっそろしく、重いかばんだな。」

そんなひとりごとが聞こえました。ポケット小僧は、うたがわれやしないかと、びくびくしていました。それは四十面相の部下のものらしく、かばんの中に、なにがはいっているかもよく知らないのでしょう。べつにうたがいもせず、そのまま、えっちら、おっちら、かばんをどこかへはこんでいきます。

やがて、建物のそとへでたようです。五十いくつのきりの穴から、つめたい風が、はいってきました。

そして、また五分ほども歩いたと思うころ、

「おい、持ってきたよ。あけてくんな。」

というささやき声がして、なにかドアのひらくような音が聞こえ、かばんは、ふわツと宙ちゆう

に浮いて、どつかりと下におろされました。

「ああ、わかつたぞ。ここは自動車の中だな。ふふん、うまくいったわい。この自動車は、きつと四十面相のすみ家へいくにちがいない。」

ポケット小僧は、まるめたからだのいたみもわすれて、にやりと笑うのでした。

すぐに出発するのかもしれない、そうではなくて、自動車はすこしも動きません。そのまま、三十分ほどすぎました。その三十分が、ポケット小僧には、二、三時間にも思われたほのです。

かれは知りませんでした、ちょうどそのころ、にせ警官隊が、にせ総監の四十面相をとりかこんで大きわぎをやっていたのです。そして、うまく警視庁の裏門から逃げだしたのです。

やがて、自動車のドアの音がして、だれかふたりほど中へはいつてきたようです。

「出発！ フルススピードだ！」

強い声が、聞こえました。

「かしら、うまくいったようですね。で、ゆくさきは？」

「きめんじょうだ。」

いきなり、自動車が走りだしました。それからは、もうだれも、ものをいいません。

きめんじょうというところへ行くらしいのですが、ポケット小僧には、そのいみがわからないのです。きめんじょうなんて、へんな名の町は聞いたこともありません。

高級の自動車らしく、エンジンの音は、ごくわずかです。しかし、いくら高級車でも、道がわるいので、ときどきおそろしくゆれます。やがて三十分も走りつづけると、車のゆれかたが、きゆうにはげしくなってきました。アスファルトのしいてないなか道にさしかかったのでしょうか。

「おやおや、ずいぶん遠くまで行くんだな。」

ポケット小僧は、心の中でおどろいています。だんだんからだのいたみが、ひどくなってきました。いかげんにおろしてくれないと、がまんができなくなるかもしれないと思いました。

およそ一時間も走ったころ、やっと車がとまりました。やれやれ助かったと思っていますと、かばんは、いちど車からおろされたことはおろされたのですが、こんどはまた、べつの乗りものにつみこまれたらしいのです。

「おや、こんどは、貨物列車かもしれないぞ。汽車で、十時間もはこばれるのだったら、

たいへんだ。からだがいただけじゃない。だいいち腹がへって、がまんできないかもしれないぞ。」

ポケット小僧は、うんざりしてため息をつきました。

すると、そのとき、ぶるるるん、ぶるるるん、ぶるるるる……という音が、かすかに聞こえ、スウツとからだが浮きあがるような気がしました。エレベーターに乗っているような感じですよ。

「アツ、わかった。ヘリコプターだ。四十面相はヘリコプターを持っているそうだから、きつとそのヘリコプターだ。だが、ヘリコプターで、いったいどこへ行くんだらう。」

ポケット小僧は、なんだかこころぼそくなってきました。

「先生、ゆくさきはきめんじょうですね。」

「うん、警視庁と明智のやつを、アツといわせてやったから、一週間ばかりやすむつもりだ。きめんじょうは、いいからな。」

「きめんじょうのかくれ家は、世間はまだちっとも知らないのですね。」

「うん、知るはずがない。だが、おれは、きめんじょうということばを、すこしばらまいてやろうかと思うんだ。いかにも恐ろしげな名まえだからね。世間のやつはきみわるがる

だろうて。名まえだけわかって、それがどこにあるかは、ぜったいにわからない神秘しんぴのなぞというやつだよ。ウフフフフ……。」

ことばのようすでは、四十面相とその部下が話しているように思われます。

ポケット小僧は漢字をすこししか知りませんので、きめんじょうと聞いてもなんのことだかわかりませんが、もつと漢字を知っている人なら、すぐに想像できるはずです。

きめんじょう……鬼面城……奇面城。あてはまる字といつては、まずこのふたつです。

どちらにしても、恐ろしい名まえです。いったい、その鬼面城、または奇面城というのは、どこにあるのでしょうか。そして、それはどんなに奇怪なお城なのでしょう。

ポケット小僧には、そこまではわかりませんでした。いまの話の「恐ろしげな名まえ」ということばで、いよいよきみがわるくなってきました。きめんじょうへつれていかれて、どんなめにあわされるのかと思うと、さすがだいたんなポケット小僧も、からだ、ゾウツと寒くなってくるのでした。

ヘリコプターは一時間ちかくも飛んで、やっとどこかへ着陸しました。

ドアのひらく音。人のおりるけはい。そして、かばんは持ちあげられ、どこかへはこんでいかれます。

どうも、ひどくさびしい場所のようです。空気がつめたいらしく、かばんの中にも、おそろしく寒いのです。

それから、長いあいだぐるぐる回り歩いているようでしたが、やがてかばんは、どこかへおろされました。

どうも、ふつうの家の中へ持ちこまれたような感じがしません。といって、空気がすこしも動かないのを見ると、原っぱでもありません。なんだか、ひどくうすきみのわるい場所です。

いまにも、かばんのふたをあけられるかと、びくびくしていました。部下の男はかばんをおくと、そのままどこかへたちさつたらしく、あたりは、墓場のようにしずかになってしまいました。

しばらくがまんしていましたが、いくら待ってもだれも近づいてくるようすがないので、ポケット小僧は、ポケットからナイフをとりだして、かばんの皮をきりひらき、そこから手をだしてとめがねをはずし、そつとふたをひらいてみました。

まっ暗です。地獄のようにまっ暗で、しいんとしずまりかえった、ひえびえとしたつめたい場所です。いったいここはどこなのでしょう？

四十面相の美術館

ポケット小僧は、いつもポケットに、万年筆がたの懐中電灯を持っていますので、それをつけてあたりを照らしてみました。

コンクリートの壁にかこまれた、物置部屋のようなところです。すみずみに、木箱きばこだとか、いすやテーブルのこわれたなどが、つみあげてあります。いっぽうの壁に、ドアがついていることがわかりましたので、そのドアに耳をあててみましたが、なんの音も、聞こえません。とつてを回すと、ドアはスウツとひらきました。

首をだしてのぞいてみると、そこはコンクリート壁の廊下のような場所でした。小さな電灯が天井についていて、ぼんやりと、あたりを照らしています。コンクリートをぬったままで、なんのかぎりもない、まるでトンネルみたいな廊下です。

ポケット小僧は、その廊下づたいに右のほうへ歩いていきました。なにしろ、ポケットにはいるくらい小さいといわれているのですから、うす暗い廊下を壁づたいに、こそそ歩いていきますと、まるで目につきません。

もしむこうから人がきても、壁にひらべったくからだをつけてしまえば、気づかれる心配もないほどです。

トンネルのようなくす暗い廊下をひとつまがつて、十五メートルほどいきますと、道がふさがってしまいました。

大きな岩が、通せんぼうをするように、廊下のまんなか立っているのです。

ふと気がつくど、どこか遠いところから、ごうごうという水の流れているような音が聞こえてきます。

岩の両側に二十センチぐらいのすきまがありましたので、そこからのぞいてみますと、岩のすぐむこうに、底もしれないまっ暗な穴がありました。さっきのへんな音は、その穴の底から聞こえてくるようです。

つめたい風が、サアツと、顔をかすめました。

「ああ、わかった。この下に川が流れているんだ。」

何メートルもしれない深い谷底に、川が流れているのです。ですから、そこは穴ではなくて、廊下と十文字になった谷なのです。

深い谷が廊下をよこぎっていて、その底を水が流れているのです。

「ここは、いつたいどこだろう。たてものの廊下のまんなかに、こんな深い谷があるなんて聞いたこともない。へんな家だなあ。」

ポケット小僧は、こわくなつてきました。ぶるぶるツと身みぶるいして、うしろのほうへひきかえしました。

もとの物置部屋の前をとおりすぎて、もつと奥へ歩いていきますと、また、廊下がまがつていて、そこに大きなドアがしまっていました。

そのなかには、明るい電灯がついてるとみえて、ドアのかぎ穴から光がもれています。耳をすますと、その部屋のなかでだれかが話をしているようです。

ポケット小僧は、かぎ穴へ目をあてて、なかをのぞいてみました。

それは、アツとおどろくような、りっぱな部屋でした。きらきら光るガラスばりの陳列だなのようなものが、いっぱいならんでいて、そのガラスのなかには、黄金の仏像や、美しいもようのある大きなつぼや、いろいろな彫刻や、宝石をちりばめた王冠や、くびかざりなどが、目もまばゆいばかりにかざつてあるのです。

天井からは、何百という水すいしやう晶の玉でかこまれたシャンデリアがさがり、その明るい光が、かぞえきれない美術品を照らしているのです。

シャンデリアの下に、りっぱな彫刻のあるまるいテーブルがおかれ、金色の四つのいすが、それをとりかこんでいて、そこにふたりの男が、こしかけていました。

ひとりは、警視總監に化けたままの四十面相。もうひとりは、制服警官にばけたままの部下でした。きつと、こいつが、ポケット小僧のかくれているかばんをはこんだのでしよう。

「いつ見てもいい気持ちだな。どうだ、このおれの美術館は……、東京の博物館だって、こんなに美しくはないだろう。」

ハハハハハ……。世間のやつらは、こんな山の中に、四十面相の美術館があるなんて夢にも知るまい。明智探偵だって、警視庁のやつらだって、おれの奇面城がどこにあるか、すこしも知らないのだ。

おれは、いままでたびたび明智につかまったが、ここだけは知らせなかった。おれは、ほうぼうにすみ家をもっているからな。そのどれかを知らせてやればよかったのだ。この美術館のある奇面城だけは、ぜつたい知らせることはできない。」

四十面相が、ほこらしげにいますと、警官すがたの部下が、ごきげんをとるようにないづちをうちました。

「そうですとも。まさかこんな山の中の樹海（海のようじゆかいに、ひろい森）のまんなかの、あの人間の顔とそっくりの大岩の下に、こんな美術館があろうなんて、だれが想像するでしょう。

かしらは、じつにいい場所をおえらびになりましたよ。

そのうえ、あの恐ろしい番人がいれば、たとえ、人間が奇面城にちかづいてきても、あの番人を見たら、まっさおになつて逃げだしますよ。われわれにたいしては、ねこのようにおとなしいやつですがね。ハハハハ……。」

それを聞いて、ポケット小僧は、いよいよ恐ろしくなってきました。

「それじゃここは、山の深い森のまんなかなんだな。そこに、人間の顔のような大岩があつて……、おれはいまその中にいるんだな。

だが、恐ろしい番人って、なんだろう？　じぶんたちにはねこのようにおとなしいといつたが、そいつは、いったいどんなやつなんだろう。人間じゃないかもしれないぞ。」

それから、部屋のなかのふたりは、まだしばらく話をしていましたが、ぼつぼつ寝室へひきあげそうになりましたので、おどろいてドアをはなれ、もとの物置部屋へひきかえしました。

まず、ドアのうかがわに長い板ぎれを立てかけて、だれかがドアをひらけば、それがたおれて音がするようにしました。その音で、目をさますためです。

それから、こわれたいすを三つならべて、その上に、ごろりとよこになると、だいたんふてきなポケット小僧は、まもなく、ぐつすりと眠りこんでしまいました。

巨人の顔

ポケット小僧が、ふと目をさましますと、まだ部屋のなかは、まっ暗でした。そんなはずはない。ぐつすり寝たんだから、もう夜があげているはずだと、ふしぎそうにあたりを見まわしていましたが、

「ああ、そうだ。この部屋には、窓がないのだ。」
と、やっとそこへ気がつきました。

ドアのほうを見ると、ゆうべ立てかけておいた板ぎれは、そのままになっています。だれもこなかった証拠です。

それにしても、おなががペこペこです。ここにだって台所はあるだろうと思ったので、

こつそり、なにかたべるものをさがすつもりで部屋をめました。

廊下も、ゆうべとおなじ暗い電灯がついているだけで、すこしも日の光はさしておりません。

奇面城というのは、岩でできているらしいから、ここは岩のなかの洞窟なんだなと思いました。

ゆうべの美術館のドアをとおりこして、もつと奥へ進んでいきますと、どこからかおもしろいにおいがしてきました。

「ははあ、肉をやいているな。きつと、こつちに台所があるにちがいないぞ。」

鼻をびくびくさせながら、においのほうへ歩いていきますと、ドアがひらいていて、そこから、かすかに白いゆげのようなものが、ただよいだしています。

ああ、ここだおもなと思つて、そつとのぞいてみますと、やっぱりそこが台所でした。白いコック帽をかぶった男が、しきりにビーフステーキをつくっているのです。

ジュウジュウと肉のやける音、油っこいうまそうなにおい、はらぺこのポケット小僧は、よだれがたれてきそうでした。

小僧は、ドアのかげにかくれて、しんぼうづよく、コックがどこかへ出ていくのを、待

っていました。

すると、二十分ほどたつて、ビーフステーキをこしらえてしまうと、コックは、いそぎ足でドアのほうへやってきました。手洗いへでもいくのでしよう。

小僧はびつくりして、いつそうふかくドアのかけに身をかくしましたが、なにしろポケット小僧といわれるほどからだ小さいので、こういうときにはべんりです。ドアのうしろで、ひらべつたくなっていると、そこには人がかくれているなんて、すこしもわからないのです。

コックがいつてしまうと、小僧はすばやく台所のなかへはいつて、できたてのビーフステーキひときれと、じゃがいもとパンを、そこにあつたナプキンにつつみ、りすのように、すばしっこく逃げだしました。

廊下を物置部屋のほうへいそいでいきますと、むこうにチラツと人かげが見えました。コックではありません。えびちや色のセーターをきた大きな男です。四十面相の部下でしょう。

ポケット小僧は、いきなり台所のほうへかけもどつて、また、もとのドアのうしろへ身をかくしました。

大男はそれともしらず台所のなかへはいって、しきりにコックを呼んでいました。まもなくコックが帰ってきたのを見て、こんなことをいうのです。

「おい、はやく朝めしをださないか。もう九時だよ。おかしらの散歩の時間がおくれるぞ。おかしらは、朝めしのあとで、山の中を歩きまわるくせがあることを知らないのか！」

「そうがみがみ、いうもんじゃねえ。もうできたんだよ。すぐ持っていくって、おかしらにそういつといてくんな。」

「よし、はやくするんだぞ。」

そうして、大男はたちさり、すこしたってコックが、大きなぼんの上にごちそうをのせて出ていきました。

小僧はコックが帰ってくるまでじっとがまんしていて、コックが台所へはいるのを待って、こっそりと、もとの物置部屋へ帰りました。

そして、木箱の上にナプキンをひろげると、まだゆげのたっているビーフステーキにかじりつき、パンをむしやむしやとやりました。そのうまかったこと。ポケット小僧は生まれてから、こんなうまいものをたべたことがないと思いました。

すっかりたべてしまうと、また廊下にて、こっそりドアのかぎ穴をのぞいてまわりま

した。ゆうべの美術館はからっぽでした。四十面相の部下が五、六人も集まって、食事をしている部屋もありました。まつ暗で、なにも見えない部屋もありました。

ある部屋では、まるで発電所のように、大きなかまのなかで石炭がもえ、発電機がまわっていました。

「ああ、そうだ。こんな山の中に電灯線がきているはずはない。じゃあ、ここでつかっている電気は、みんなじぶんでおこしているんだな。さつきビーフステーキをやっていたのも、電熱器のようだったぞ。わああ、おったまげた。四十面相のやつ、じぶんで電気をおこしていやあがる。」

ポケット小僧は、その大じかけに、びっくりしてしまったのです。

なおもまわり歩いているうちに、とうとう、四十面相のいる部屋を見つけました。

かぎ穴からのぞくと、その部屋も、おそろしくりっぱにかぎりつけてありました。いすも、テーブルも、壁も、カーテンも、すっかり金ぴかなのです。ほんとうの金かどうかはわかりませんが、まるで、^{ぶつだん}仏壇の中のように、金色にかがやいているのです。

四十面相は、まつ黒なビロードの服をきていましたが、その肩や胸に、ちかちか光る金色のもようがついているのです。まるで、どこかの国の將軍のようです。

四十面相は、いまビーフステーキの食事を、おわったところでした。テーブルの上には、グラスがいくつもならび、いろいろな洋酒のびんが立っていました。

四十面相のそばに、美しい女の人が立っています。まっ白な、ふわふわした洋服をきて、くびには真珠の首かざりが、かがやいているのです。

「じゃあ、おでかけになりますか。」

女の人が、やさしい声でいいました。

「うん、朝の散歩をかかすわけにはいかん。森のなかを歩きまわるのは、いい気持ちだからな。きょうは、おまえも、いつしよにいこう。」

四十面相は、そういつて立ちあがりました。

ポケット小僧は、それを聞くと大いそぎでドアの前をはなれ、壁のいちばん暗いところに、ぴったり身をつけて、そつとドアのほうを見えていました。

ドアがひらいて、四十面相と女の人が廊下にできました。そして、またドアがしまりました。ふたりは、なかよくむこうへ歩いていきます。

さいわいポケット小僧に気がつかなかったようです。

小僧は壁づたいに、ふたりのあとを追いました。ふたりは台所とははんたいのほうへ、

ずんずん歩いていきます。

「へんだなあ。こつちへいったら、あの大岩で、いきどまりになっているのに。」

ポケット小僧は、ふしぎに思いながらついていきます。

ふたりは、あの大岩のところへくると、四十面相が手をのばして、右手の壁のすこしくぼんだところを、ぐつとおしました。すると、あの大岩が、ギイイツと音をたてて、むこうへたおれていくではありませんか。

こちらから見ていると、大岩のてっぺんには二本の頑がんじょう丈じょうなくさりがついていて、たぶん電気じかけでしょう、そのくさりがのびるにつれて、大岩がむこうへたおれていくのです。

むかしのお城のつり橋と、おなじしかけでした。とうとう大岩は横だおしになり、あの深い谷の上によこたわったのです。

四十面相と女の人は、その岩の橋をわたってむこうへ歩いていきます。見ると、そこからむこうは、コンクリートのぬつてない岩のトンネルです。そして、そのトンネルの入口が、すぐむこうにまぶしく光っていました。トンネルのそとには、太陽が照りかがやいているのです。

ふたりがトンネルを出てから、しばらくのあいだ待って、ポケット小僧はその岩の橋をわたり、すばやくトンネルの入口まで走って行って、そと、そとをのぞいてみました。

ふたりは遠くへいつてしまったとみえて、そのへんには人のすがたもありません。

トンネルのそとは、岩と土のまじった広っぱです。そのまわりを、見とおしもきかぬ深い森が、とりまいています。

ポケット小僧はトンネルからとびだして、広っぱのまんなかにある大きな岩のかげに、うずくまりました。もし、だれかに見つかつてはたいへんだと思ったからです。そこへうずくまって、トンネルの上を見あげました。

ポケット小僧の顔が、まっ青になり、目がとびだしそうに見ひらかれました。なにがそんなに、小僧をおびえさせたのでしょうか。

ああ、ごらんささい。トンネルの上には、五十メートル四方もあるような、巨大な岩山が、そびえていたではありませんか。しかも、それはただの岩山ではありません。その巨大な岩山ぜんたいが、人間の顔のかたちをしていたのです。

奈良^{なら}の大仏のからだの何倍もあるような、想像もできないほどの、大きな大きな顔なのです。

彫刻ではありません。岩山が、しぜんにそういうかたちをしていたうえに、いくら人間が手をくわえたもののように思われます。

ああ、その顔……。なんとという恐ろしい顔でしょう。悪魔が笑っているのです。さしわたし十メートルもあるような巨大な目で、じっと、こちらをにらみつけています。そして、するどい牙きばのある三十メートルの口で、何百人の人間でも、ひとのみにしようと待ちかまえているようです。

恐ろしい番人

その巨人の顔の前は広っぱになっていて、いつぼうのすみにヘリコプターがおいてあります。ポケット小僧はヘリコプターのそばへいき、操縦席にのぼりついて、その中をしばらく覗きました。

こしかけのうしろに、ズックでつつんだ四角なかごがおいてあります。中をのぞいてみると、キャベツのきれはしが、ころがっていました。

このかごは、どこかの町で食料品をしいれて、ここへはこぶどきに、つかうのでしょうか。

ポケット小僧は、その大きなかごを見て、にやりと笑いました。うまい考えがうかんだからです。

「行きはかばんの中、帰りはかごの中か。ウフフフ……。おれもなかなか知恵があるなあ。」

そんなひとりごとをつぶやいて、ヘリコプターをおりましたが、そのとき、どこかから、みょうな叫び声が聞こえてきました。

「ギヤアツ、ギヤアツ！」

というようなへんな声です。鳥がいないのでしょうか。深い山の中ですから、どんな恐ろしい鳥がいるかわかりません。

ポケット小僧は、びつくりして、声のするほうを見ました。広っぱには、なんにもおりません。そのむこうの森の中から聞こえてくるのです。

おずおずと、そのほうへ近づいていきました。森には何百年もたったような大きな木が見とおしがきかないほどしげっていました。それらの木の幹みきにはつたがまといつき、はいあがり、映画で見たジャングルのようなありさまです。どこかから、ターザンの「ヤッホ……。」という叫び声が聞こえてきそうなきです。

「ギャアツ、ギャアツ。！」

そのとき、ついまぢかで、あのみよくなき声がしました。

ポケット小僧は、おもわず逃げごしになりながら、木のあいだをすかして見ますと、五、六メートルむこうの暗い森の中に、なんだか黄色いようなものが、ぶらんぶらんと、ぶらさがっているのが見えました。

鳥ではありません。ねこのような動物です。そいつが、あと足をつたにまかれて、木の上からぶらさがっているのです。

まきついたつたをとこうとして、いろいろに身をくねらせるのですが、どうしてもとけません。ぶらんこのように、さかさまにぶらさがったまま、あのみよくなき声をたてて、助けをもとめているのです。

ポケット小僧はそれを見て、「ねこならなんでもないや。」と思いながら、もつとそばまで近づきました。

足をつたにしめつけられ、ギャアギャアいつて苦しんでいます。かわいそうになってきました。

「よし、いま、おれがはずしてやるからな。待ってろよ。」

せのびをして、宙でもがいているねをだきとり、足にからまっているつたをといてやりました。

ねこは、ポケット小僧の胸に頭をすりつけて、じっとしています。助けてもらったのを、よろこんであまえているのです。

その頭をなでてやりながらよく見ますと、どうもようすがおかしいのです。ねこにしてはすごい顔をしています。みけねこのように見えますが、黄色と黒のしまがもつとはつきりして、なんだか虎のような感じですか。ひよっとしたら、これは、虎の子ではないのでしょうか。

そう思うと、ポケット小僧はこわくなってきました。じっとこちらを見ている青く光る目が、だんだんものすごくなくなっていくのです。

そのときです。

「ごうツ……。」

という恐ろしいうなり声が聞こえました。だいているねこではなく、もつとむこうのほうから、ひびいてきたのです。

びっくりして、そのほうを見ますと、木の幹のあいだを、ちらつと黄色いものが、よこ

ぎりしました。黄色に太い黒のしまのある動物です。

「アツ、虎だツ！」

とおもうと、ポケット小僧は、もう身うごきができなくなっていました。

そいつは、ヌウツと大きなものすごい顔をあらわし、のそりのそり、こちらへ近づいてきます。大きな虎です。いまたすけてやった虎の子の親かもしれませぬ。

ああ、わかりました。四十面相の部下が、「恐ろしい番人」といったのは、こいつのことだったのです。

四十面相は、いぬのかわりに、この大きな虎をかって、奇面城の番をさせているのでしよう。

ポケット小僧は、いまにもこの虎にくわれてしまうのかと、生きたこちもありません。といって、逃げだそうにも、足が動かないのです。らんらんとかがやく大きな目で、じいつとにらまれると、電気にでもかかったように、身がすくんでしまうのです。

虎はもう、すぐ目の前にきていました。はっはつと、くさい息がこちらの顔にかかるほどです。

すると、ポケット小僧にだかれていた虎の子が、うでからとびだして、大虎のそばへか

けよって、じゃれつくのでした。

大虎は、虎の子のからだをなめてやりながら、さもかわいくてしかたがないというように、目をほそくしています。

そのようすでこの大虎は、父親ではなくて、母親のように思われました。

しばらくすると大虎は、また、「ごうツ……！」とうなって、ポケット小僧のほうを見ました。しかし、べつに危害をくわえるようすありません。なんだか、「ぼうやを助けてくださって、ありがとう。」と、おれいをいつているように見えました。

ポケット小僧は、からだは小さくても、だいたんな子どもですから、それを見ると、すっかり安心して、そつと手をだして、大虎の頭をなでてみました。

ガツとくいついてくるかとおもうと、そうではなくて、目をほそめて、おとなしくしています。恩人のポケット小僧に、すっかりなついてしまっているのです。

「きみは、恐ろしい顔をしているが、心はやさしいんだね。よしよし、じゃあ、いつかまた、きみのやつかいになるときがあるかもしれないよ。」

ポケット小僧は、人間に話しかけるようにそんなことをいって、しばらく虎の頭や首をなでていましたが、四十面相が、朝のさんぽから帰ってきて、みつかるみたいへんですか

ら、いそいで奇面城の洞窟どうくつのほうへ、ひきかえすのでした。

親子の虎は、それを見おくつて、のそのそついてきます。

そして、洞窟の前まできたとき、またしても、どこからか、「ごうツ……！」という恐ろしいなり声が、ひびいてきました。

うしろからついてくる、二ひきの虎とらではありません。洞窟の入口にならんで、いくつも小さなほら穴があるのですが、いまの声は、そのほら穴の中から、ひびいてきたようです。それじゃ、まだほかに虎がいるのかと、びっくりして立ちどまっていきますと、そのほら穴のひとつから、又ウツと大きな虎がたをあらわしました。こいつは、さっきの虎の子の父親かもしれません。

「ごうツ……！」

そいつは、ほら穴から全身をあらわして、もういちどなり声をたてました。

すると、うしろにいた母親らしい虎が、そこへ歩いて行って、顔をつきあわせて、なにか知らせているようでした。

「あの子を、助けてくださったのよ。」と知っているのかもしれない。

二ひきの大虎は、顔をそろえて、ポケット小僧のほうを見ました。やさしい目をしてい

ます。

「ありがとう。」と、おれいをいっているのでしょう。

ポケット小僧は、恐ろしい猛獣がそんなにやさしくしてくれるので、すっかりうれしくなつてしまいました。親子三びきの虎と、もうすこし遊んでいたいと思いましたが、四十面相や部下のものに見つかつてはたいへんですから、いそいで三びきの虎のほうへ手をふつて、わかれをつげると、そのまま洞窟の中へはいつていきました。

ポケット小僧の冒険

ポケット小僧が、奇面城の洞窟に帰ると、まもなく、四十面相と美しい女の人が、さんぽからもどつてきました。

それから、まる二日のあいだポケット小僧は、洞窟の中に足をひそめていたのです。夜は、あの物置部屋で眠り、昼は、みつからぬように気をくばりながら、ほうぼうの部屋をのぞきまわり、四十面相のすみ家のようにすをしらべました。

さいわい、洞窟の廊下はうす暗いので、四十面相の部下たちにあつても、すばやく身

をかくせば、相手にさとられないですむのです。食事は、ときどき台所からぬすみ出せばいいのですから、おなかがへるようなこともありません。

そうしてしらべたところによりますと、洞窟の中にすんでいるのは、四十面相からコックまでくわえて、十一人にすぎないことがわかりました。

四十面相の部下は、もつとたくさんいるのでしようが、いまここには十一人だけなのです。

しかし、十一人がごはんをたべているのですから、どこからか食料を、はこばなければなりません。電気をおこす石炭もいるでしょうし、そのほか、いろいろなものを持ってこなければなりません。

自動車のとおれない山の中です。そういうものはこぶには、人間が背中にしよって山道をのぼってくるか、ヘリコプターをつかうほかはないのです。あのヘリコプターは、たびたびここから飛びたつて、そういうものを、はこんでいるのにちがいありません。

ポケット小僧は、それを待っていたのです。東京へ帰るのには、そのおりを待って、うまくやるほかはないと考えていたのです。

すると、さいわいにも三日めの夜、そのおりがきました。

四十面相が、ふたりの部下に、ヘリコプターでどこかの町へ行って、食料品をつんでくるように命令しているのを、立ちぎきしたのです。

そこで、ふたりの部下が身じたくをして、洞窟をでていくあとを、そっとついていきました。

夜のことですから、そとにでるとまっ暗です。ふたりの部下は懐中電灯をつけて、足もとを照らしながら、ヘリコプターのほうへ近づいていきます。昼間のうちに、いつでも飛べるように準備がしてあったのです。

ポケット小僧は、ふたりがヘリコプターに乗りこまないさきに、あの操縦席のいすのうしろにある、ズックをかぶせたかごの中へ、もぐりこむつもりでした。

しかし、いくら闇夜といつても、ふたりをおいこしたら、すぐに見つかってしまいます。なにか計略をもちいなければなりません。

ポケット小僧はりこうな少年ですから、それも、ちゃんと考えてありました。かれは、ふたりの部下のそばをはなれて、よこての森の中へかけこみました。そして、いきなり、「キヤーツ、助けてくれえッ……。」と叫んだのです。

おどろいたのは、ふたりです。だれもいるはずのない森の中から、ひめいが聞こえてきたので、すてておくわけにはいきません。

おおいそぎで森の中へかけこんで、そのへんをさがしまわりました。

しかし、ふたりがそこへはいつてきたころには、もうポケット小僧は森の中を走って、ヘリコプターのほうへ近づいていました。

そして、部下たちがさがしつかれて、森のそとへでたときには、とつくに、あの操縦席のかごの中へ身をひそめていたのです。

かごにはズツクがかぶせてあるので、中からその口をしめれば、大きなふろしきづつみのようになり、もう見つかる心配はありません。

「たしかに、人間の声だったな。」

「うん、おれもそう思った。だが、鳥がないたのかもしれない。この山には、人間みたいななき声をだすお化け鳥がいるからね。聞きちがいだよ。こんなところへ人間がくるはずがないからね。」

ふたりの部下は、ぶつぶつそんなことをつぶやきながら、操縦席へ乗りこんできました。やがて、プロペラがまわりはじめます。

ぶるるん、ぶるるん、ぶるるん。

そして、機体がスウツと浮きあがったかとおもうと、だんだん速度をはやめながら、どこもしれず飛んでいくのです。

一時間も飛んだでしょうか。だんだん速度がにぶくなり、機体がさがっていつて、どこかへ着陸しました。

ポケット小僧はズックにつつまれているので、それがどんな場所だか、すこしもわかりません。

「おい、あすこに、自動車が待っているぜ。さあ、かごとおろすんだ。」

ズックにつつまれたかごとを、操縦席の入口のところまでひっぱって置いて、地面におりたふたりが、それをひきずりおろすのです。

かごは、グツとひかれ、どしんと地面にたたきつけられました。

そのひょうしに中にいるポケット小僧は、頭や肩や腰をひどくかごにぶっつけましたが、いくらいたくても、声をたてることもできません。歯をくいしばってがまんしていました。なにしろ、ポケットにはいるといわれているほどの小さな少年ですから、めかたもかるく、ふたりの部下は、まさか、かごの中に人間がはいっているなんて夢にもしりませんの

で、いつもよりすこしぐらい重くても、うたがって見ようもしないのでした。

かごを地面におくと、ふたりは、むこうの自動車のほうへ歩いていったようです。

そのすきにポケット小僧は、そつとズツクの口をひらいて、そとをのぞいてみました。まっ暗です。家などどこにも見えません。町から遠くはなれた広い原っぱのようなところ

です。二十メートルほどむこうに、ヘッドライトを消した自動車の黒いかげが見え、ふたりの部下はそのそばに立って、なにか話をしています。

「いまだッ！」

と思いました。ズツクの口をじゆうぶんひらいて、外へでると、もとのとおりにズツクをしめ、そのままはうようにして、ヘリコプターから遠ざかっていきました。

部下たちは、なにもしりません。自動車の運転をしていた男にも手つだわせて、車のなかから、箱にはいったもの、紙につつんだものなどを、かごのところへはこんでいます。肉、かんづめ、やさいなどの食料品でしょう。

ポケット小僧は原っぱのくさむらの中に寝そべって、遠くからそのようすを見ていました。

しばらくすると、ズックでつつんだかごをヘリコプターにのせ、ふたりの部下も運転手にわかれをつけて、操縦席に乗りこみました。

そして、ぶるるん、ぶるるんと、ヘリコプターは空へ、自動車もヘッドライトをつけて、むこうの大きな道へと、遠ざかっていきました。

かれらは、とうとう気がつかなかったのです。ポケット小僧はたすかったのです。しかし、これからが大しごとです。東京に帰って明智探偵や小林少年にこのことを報告し、大ぜいの警官隊といっしょに、奇面城を攻撃して、怪人四十面相をとらえなければなりません。

まる二日、洞窟の中をしらべ、悪人たちの話を立ちぎきしたおかげで、ポケット小僧には、奇面城が、どのへんの山の中にあるかということも、だいたいわかっていました。

いよいよ、奇面城の総攻撃が始まるのです。名探偵明智小五郎は、どんな計略を考えだすでしょうか。また、四十面相は、どのようなでで、これをふせぐでしょうか。千^せ変^ん万^{ばん}化^かの知恵と力のたたかいが、やがてはじまろうとしているのです。

ポケット小僧は、それを考えると胸がわくわくしてきました。怪人四十面相のほんとうのすみ家、あの恐ろしい奇面城が、どこにあるかを知っているのは、世界じゅうにおれひ

とりだと思うと、うれしくてしかたがないのです。

ヘリコプターも自動車も、かげが見えなくなってしまったので、ポケット小僧は安心して立ちあがりました。そして、原っぱをよこぎり、国道らしい大きな道にでると、さっきの自動車がいった方角へ、暗闇のなかをてくてくと歩きだすのでした。

秘密会議

チンピラ隊のポケット小僧は、まっ暗な街道を、一時間あまりもてくてく歩いて、やっと大きな町にたどりつきました。それは埼玉さいたま県のT町だったので。

ポケット小僧は、T町の駅の長いすの上で一夜をあかし、あくる朝の汽車で東京に帰りました。三百円ほどもっていたので、やっと汽車のきつぷが買えたのです。

東京につくと、すぐに明智探偵事務所へ行って、明智先生と小林団長にあい、くわしく報告しました。

「わあ、えらいぞ、ポケット小僧。たいへんなてがらをたてたねえ。」

小林少年が、おもわず歓かんせい声をあげました。

明智探偵も、ポケット小僧の頭をなでながら、

「どんなおともおよばない大てがらだよ。四十面相のほんとうのかくれ家、奇面城なんて、長いあいだだれも知らなかった。ぼくも、まったく気づかないでいた。それをきみが、ひとりの力で、発見したんだからね。きつと警視總監からごほうびが出るよ。

よし、これからすぐに警視庁へいこう。そして、總監にこのことを報告して、どうして奇面城をせめるか、その方法を相談しよう。」

明智探偵はそういつて、卓上電話の受話機をとると、警視庁の中村警部をよび出し、總監にこのことをつたえてくれるようにたのみました。すると、總監も捜査課長も待つているからという返事があったので、そのまま自動車をよんで、ポケット小僧をつれて、警視庁へいそぎました。

それから二十分ほどして、警視庁の總監室には、おおつくえ大机の正面に山本警視總監、その前に明智小五郎、堀口捜査一課長、中村警部が席につき、ポケット小僧も、明智探偵のとなりの大きいすに、ちよこんとこしかけて、しかつめらしい顔をしていました。

山本總監は、四十面相がじぶんに化けて、警視庁をばかにしたことを、ひじょうにおこっていましたので、この事件にかぎつて、總監室で秘密会議をひらくことにしたのです。

「きみがポケット小僧か。よくやってくれた。あとで、どっさりほうびをあげるよ。で、きみは、その奇面城がどこにあるのか、わかっているんだらうね。」

総監が、ポケット小僧にたずねました。

「はい、それは奇面城にかくれているあいだに、四十面相の部下たちの話を立ちぎきしてわかりました。それはこぶし岳だけという山です。その山の北がわの深い森の中に、あの恐ろしい顔の岩があるのです。」

それをひきとつて、明智探偵が説明しました。

「甲武信岳こぶしだけというのは、埼玉県と長野県の境にそびえている山です。そこから食料などを仕入れるのに、いちばん近い町は埼玉県のT町です。奇面城からT町へは、二日か三日にいちど、四十面相のヘリコプターが、かよっているらしいのです。ポケット小僧は、そのヘリコプターにかくれて逃げ出してきたのです。」

すると、堀口捜査課長が、こともなげにいうのでした。

「武装した警官を一小隊ほどやって奇面城をかこませるんですな。奇面城の中には、四十面相も入れて十一人しかいないというから、武装警官一小隊でじゅうぶんでしょう。自動車のいけるところまでいって、それから歩いてのぼるんですな。」

それを聞くと、明智探偵はかぶりをふって、

「いや、それはあぶないですよ。奇面城のまわりには、見はりのものがあるにちがいない。警官隊が山をのぼっていったら、すぐに気づいて、じゅうぶん用意をする。あいつらはピストルや銃を持っているでしょうし、そのほか、どんな武器ぶきがあるかわからない。それと正面からたたかっては、こちらにも、けが人を出します。正面しようとは、さけたほうがいいと思います。」

と反対をとなえました。

「ふん、なにか計略をもちいるというんだね。明智君、きみには、うまい計略が、あるのだろうね。」

山本総監がたずねました。

すると明智探偵は、いすを前にのり出し、大机にひじをつけて、ひくい声で話しはじめたのでした。

「じつは、こういう計略を考えたのです。四十面相のヘリコプターが、たえずT町へやってくる。それをうまく利用するのですよ……。」

明智探偵は、そこでいつそう声をひくくしましたので、総監をはじめ、捜査課長も中村

警部も、ぐつと顔を前に出し、四人が頭をくつつけるようにして明智のないしよ話をききとりました。

「うん、おもしろい。明智君らしいやりかただ。ひじょうにむずかしいけれども、きみならできるかもしれない。やってみるだけのねうちはあるね。」

総監は明智の話を聞いて、にこにこしながら賛成しました。

「それについて、中村君、きみの部下の三浦刑事みづらをかしてもらいたいんだがね。あの男は、警視庁第一の変装の名人だからね。」

明智が中村警部にたのみますと、警部はこころよく承知しました。

「いいとも、三浦はたしかに変装がうまい。四十面相までいなくても、十面相くらいのうでまえはあるよ。あの男がやくにたつなら、どうかつかってくれたまえ。」

それから三十分ほど、こまかいうちあわせをしたあとで、この総監室の秘密会議はおわりました。山本警視総監はいすから立って、

「では明智君、きみからの、よい知らせを待つことにします。よろしくたのみますよ。」
といて、明智探偵の手をにぎるのでした。

かえだまふたり

ポケット小僧が奇面城を逃げ出してから二日めの夜のことです。もう十時をすぎている。
した。

埼玉県T町郊外のあのさびしい原っぱに、いつかの晩とそっくりの自動車が、ヘッドライトを消してとまっていました。

その自動車に乗っているふたりの男は、じつと星空を見あげて、なにかを待っているようです。

しばらくすると、はるかむこうの空から、ぶるるる……という音が聞こえ、それが、だんだん大きくなってきました。ヘリコプターです。

やがて、ヘリコプターはおそろしい風をまきおこして、すぐむこうに着陸しました。そして、操縦席から、ふたりの男がおりて、こちらへ歩いてくるのが、星の光でかすかに見えます。

ふたりの男は、ズックでおおった大きなかごを、両方からさげていました。

「ひゅう、ひゅう。ひゅう……。」

こちらの自動車の中のひとりが、口ぶえで、ある歌のふしを吹きました。すると、
「ひゆう、ひゆう。ひゆう……。」

むこうから歩いてくる男のひとりも、同じふしの口ぶえを吹くのです。これがあいつの暗号なのでしょう。

ふたりの男は、自動車のそばに、かごをおろして立ちどまりました。自動車のドアがひらいて、中から箱に入れたもの、紙ぶくろにいれたものなど、いろいろの食料品を、つぎつぎとさし出します。そのふたりは、それをうけとっては、かごの中へ入れるのです。

五分もたたないうちに、かごがいつぱいになりました。「じゃ、こんどは十四日の晩だよ。時間はいつものとおり。これが品書しながきだ。それじゃあ。あばよ。」

このつぎまでに、買い入れておくものを書きつけた紙をわたし、ふたりの男は重くなつたかごをさげて、えつちら、おつちら、ヘリコプターのほうへ帰っていきました。

それを見おくつて自動車は出発し、広い街道のむこうへ遠ざかっていきます。ところが、そのときみようなことがおこりました。

走りさつた自動車のあとへ、いまのとそつくりの大型自動車が、どこからかスウツとやってくる、ぴたりと、とまったのです。

「ひゅう、ひゅう、ひゅう……。」

自動車の窓から、するどい口ぶえがなりひびきました。さっきの暗号とおなじ歌のふしです。

ヘリコプターに、かごをつみこんでいたふたりの男が、こちらをふりむきました。ふたりは、ずっとむこうをむいていたので、自動車がいれかわっていることに気がつかないようです。

「おい、呼んでるぜ。なんか聞きわすれたことでもあるのかな。めんどろだけれど、いつてみよう。」

「うん、そうしよう。ひゅう、ひゅう、ひゅう……。」

と、こちらもおなじ口ぶえをふいて、自動車のほうへ近づいていきます。

ふたりが、自動車のよこまでいきますと、ドアがひらいて、自動車のふたりも、そとへ出てきました。そして、ヘリコプターのふたりと、むかいあって立ちました。

「アツ。」

ヘリコプターのふたりが、びっくりしたように叫んで、両手をうえにあげました。自動車のふたりが、てんでにピストルをかまえていたからです。

自動車の運転手のとなりに小さな子どもがいて、窓の中からじつと、こちらを見ていました。それはポケット小僧でした。

「さあ、そのピストルはぼくが持つ。こいつらの服をぬがせてから、縄をかけてくれたまえ。」

自動車の男のひとりがそういつて、もうひとりからピストルをうけとり、二ちようのピストルを両手にかまえました。

それを見ると、車の中にいたポケット小僧もとびだしてきました。もうひとりの男は、ポケット小僧に手つだわせて、ヘリコプターのふたりの服ふくをつぎつぎとぬがせたうえ、手足をしばり、さるぐつわをはめました。

「よし、それじゃあ、このふたりを自動車の中へ入れるんだ。」

ピストルをかまえていた男も、それを地面において手つだいました。

それから変装です。変装用のけしよう箱をとり出し、懐中電灯でヘリコプターの男たちの顔をしらべながら、それににせてじぶんの顔をいろどるのです。

自動車に乗ってきた男は、ふたりとも変装のくろうとらしく、顔をつくることが、じつにじょうずでした。またたくまに、ヘリコプターの男たちとそっくりの顔になってしま

ました。

それがすむと、ぬいだ背広は車の中にほうりこみ、運転台の男に声をかけました。

「さあ、出発してよろしい。このふたりの男を本署へつれていってください。ふたりのあつかいについては、署長さんがよくござんじですからね。」

それを聞くと運転台の男は、うなずいて車を出発させました。

いまの話のようすでは、この自動車はT町警察署のもので、運転手はおなじ署の警官なのでしよう。

ヘリコプターの男になりましたふたりは、そのまま、ポケット小僧といっしょにヘリコプターに乗りこみ、ひとりが操縦席について出発しました。この男はヘリコプターになれているらしく、その操縦ぶりはじつにみごとなものでした。

敵のただ中へ

それから一時間ほどのち、四十面相の部下のにせものと、ポケット小僧をのせたヘリコプターは、奇面城の前の広っぱに着陸していました。

四十面相の部下のヘリコプターがかりは、ジャツキーとよばれている男で、その助手のもうひとりの男は、五郎という名でした。ポケット小僧がそれを、ちゃんとおぼえていたのです。

ジャツキーと五郎になりましたふたりは、食料をつめたかごをヘリコプターからおろし、それをはこんで、奇面城へはいろうとしました。

そのとき、「ごうツ……。」という恐ろしいなり声が、どこからかひびいてきたのです。

「アツ、いけない、虎だ。虎がやってくる……。」

ポケット小僧が、とんきような声をたてました。

「エツ、虎だつて？」

ジャツキーと五郎が、口をそろえて叫びました。ふたりとも、虎の番人がいることは聞いていましたが、四十面相の部下に変装してしまえば、だいじょうぶだと思いきんでいたのです。

ところが虎は、おけしようにや服装なんかではごまかされません。においです。虎の鼻は人間よりもずつとするどいので、人間のひとりひとりのおいが、ちゃんとわかるのです。

いま、ヘリコプターからおりたふたりは、これまで、かいだこともないような、においをもっている。

こいつはあやしいぞと、虎は考えたのでしよう。

星あかりですかして見ると、二ひきの大きな虎が、もう十メートルほどむこうまで近づいていました。

にせジャツキーとにせ五郎は、ピストルを持っていましたから、うまくうてば、それで虎を殺すことができるかもしれません。

しかし、そんなことをすれば、ピストルの音を敵に聞かれますし、虎の死がいのこるので、たちまちあやしまれて、せつかく、ここまでのりこんできた苦心が、水のあわになつてしまいます。逃げるほかはありません。うまく木の上にもものぼれば、難をのがられるかもしれないのです。

そこでふたりは、虎とはんたいのほうへ、いちもくさんにかけだしたのです。

「アツ、走つちやいけないッ。」

ポケット小僧があわてて叫びましたが、もうおそい。そのときは、もう、虎もかけだしていたのです。

猛獣に出あったときは、じつとしていなければいけない、ということを、ふたりのおとなは忘れてしまったのです。

じつとしていれば、虎のほうでもにらんでいるばかりですが、走りだしたら、虎はいっぺんにとびかかってきます。虎とかけっこしたって、とても勝てるものではありません。このままほうっておいたら、ふたりは、虎にくわれてしまう運命です。

ポケット小僧は、とつさに考えました。

「二ひきの虎は、ぼくのことをおぼえていないかしら。このあいだ虎の子を助けてやったときには、あんなによるこんでいたんだから、まだおぼえているかもしれない。よしっいちかばちか、やってみよう。」

そう決心すると、ポケット小僧は大手をひろげて、いまジャッキーと五郎にとびかかろうとする、二ひきの虎の前に立ちふさがりました。

ああ、あぶない。ポケット小僧は、ふみつぶされてしまうかもしれませぬ。

立ちふさがっているポケット小僧の目の前に、二ひきの虎の恐ろしい顔が、グウツと近よってきました。

「アツ、もうだめだ。」

とおもいました。そして、目をつぶってしまいました。

いまにも、ふみつぶされるか、いまにもかみつかれるかと、かくごしていましたが、なにごともおこりません。

顔に、あつい息が、ふうつ、ふうつとかかりました。そしてあたたかい毛がわのようなものが、からだにこすりついてくるのです。

ポケット小僧は、へんだなと思いつつながら目をひらきました。

すると、一ぴきの虎は、むこうに立ちどまってじつとこちらを見えています。もう一ぴきの虎は、ポケット小僧にからだをすりつけてあまえているではありませんか。

やっぱ子どもを助けられた恩を、わすれないでいたのです。からだをすりつけているのは、母親の虎にちがいありません。むこうに立って、それを見ているのは、父親のほうでしょう。

ジャツキーと五郎は、それを見てびっくりしてしまいました。

「ポケット君、きみは虎をだまらせる力があるのか。おどろいたねえ。」
ジャツキーが、つくづく感心したようにいっただけでした。

「そうじゃありません。この虎はぼくに恩がえしをしているのです。」

ポケット小僧は、このあいだ虎の子を助けてやったことを話しました。

「おお、そうだったか。虎もえらいが、きみもえらいぞ。やさしい心というものは、どんな動物にだって通じるのだねえ。」

ジャツキーは、おもわずポケット小僧の頭をなでて、ほめたたえるのでした。

「ジャツキーさん、あれが奇面城ですよ。」

ポケット小僧は、てれかくしのように、星空にそそり立つまっ黒な岩山を指さしました。「なるほど、恐ろしい形をしているねえ。……それじゃあ、奇面城の中へはいろいろか。虎には見やぶられたが、虎ほどの鼻のきかない人間には、見やぶられる心配はないからね。」そこで、三人は、食料品のかごをはこんで、巨人の顔の下の洞窟へはいつていきました。あの岩の橋をおろす、かくしボタンは、入口の方にもあります。ポケット小僧は、そのボタンのありかを、ちゃんと知っていたのです。そのボタンをおして、大きな岩の橋をおろし、三人はいよいよ、四十面相のすみかへはいつていきました。

まめくろんぼ

それから、三人は奇面城の洞窟の中にはいり、ジャッキーと五郎は、四十面相の部屋へ
いって、

「いま、帰りました。」とあいさつしましたが、四十面相は、ふたりがにせものであるこ
とに、すこしも気づかないのでした。

ジャッキーと五郎は、それでいいのですが、ポケット小僧が、もしだれかに見つかった
らたいへんです。奇面城には、そんな小さな子どもは、ひとりもないからです。

そこでポケット小僧は、東京から用意してきた真っ黒なシャツ、頭からかぶる黒覆面、
黒い手ぶくろ、黒いくつしたを身につけて、全身真っ黒なすがたになって、敵の目をくら
ますことにしました。

ポケットにはいるくらい小さいというので、「ポケット小僧」とあだながついているの
ですから、そのちびすけが、真っ黒になったら、こんどはまめくろんぼです。

まめくろんぼは、まえとおなじように、夜は、がらくたのほうりこんである物置部屋の
すみで寝ました。たべものは、まえのようにすいじ場からぬすみださなくても、にせのジ
ヤッキーと五郎が、わけてくれますから心配はありません。

まめくろんぼは、おそろしく小さいうえに、頭から足のさきまでまっ黒なので、洞窟の廊下で四十面相の部下にであつても、けつして見つかりません。廊下は、うす暗いし、まめくろんぼは、とてもすばやいので、うまく相手の目をくらましてしまうからです。それから二週間ほどたちました。四十面相は奇面城におちついたまま、どこへも出ていくようがありません。

にせもののジャツキーと五郎は、そのあいだに、五度もヘリコプターに乗つて、ふもとの町へいきました。それは、食料品やそのほかのものを、はこぶためでもありましたが、もつとほかに目的があつたのです。

ヘリコプターが、ふもとの町から帰るときには、ひとりずつあたらしい味方の人間を、こつそり乗せていたのです。いちどに、ひとりずつですから、五度では、五人の人間が、奇面城につれこまれたことになります。

それでいて、奇面城にすんでいる人数は、やっぱり十一人なのです。まめくろんぼはベつです。おとなが十一人です。そして、それらの人は、みんな四十面相の部下なのです。あたらしくやつてきた五人の男も、それぞれ部下のだれかに化けて、なにくわぬ顔で仕事をしていますから、だれもうたがうものはありません。その五人は、ジャツキーや五郎に

おとらぬ変装の名人でした。

しかし、ふしぎなことがあります。ヘリコプターがふもとの町へいくときには、ジャッキーと五郎だけで、四十面相の部下を乗せているわけではありません。そして、帰りにひとりずつつれてくるのですから、いまでは、奇面城の中の人数は十一人たす五人の、十六人になっていなければなりません。それがやつぱり十一人のままなのですから、どうもへんなのです。

あたらしくきた五人のにせ部下のかわりに、ほんとうの部下が五人、どこかへかくされてしまったのです。むろんにせのジャッキーと五郎が、やったことにちがいありませんが、その五人の部下は、いったいどこへかくされているのでしょうか。

ところで、二週間ほどたったある日のこと、まめくろんぼのポケット小僧が、たいへんな失敗をやってしまいました。

まめくろんぼは、忍術つかいのようなまっ黒なからだで、洞窟の中のあちこちを、毎日しらべまわっていました。そして秘密の通路や秘密のしかけなどを、いろいろ見つけだして、にせジャッキーに報告しているのです。

洞窟の廊下や部屋の中を、ねずみのようにチヨロチヨロと歩きまわっても、すこしも気

づかれないので、つい、ゆだんをしました、そして、とうとう四十面相の部下に見つかったのです。

そのとき、ポケット小僧は、廊下を歩いていました。はじめのうちは、歩くときには前にもうしろにも、ゆだんなく気をくばっていたのですが、このごろは、たかをくくって、つい、うしろのことなんか考えないで歩いていることがあるのです。

そのときも、うしろのことをわすれていたのですが、のつぽの初はつこうという四十面相の部下が、ポケット小僧のうしろから歩いてきました。「のつぽ」といわれるほどあって、おそろしく背の高いやつです。

のつぽの初はつこうは、目の前を、頭から足のさきまでまっ黒なちびすけが、ヒョコヒョコ歩いているので、びつくりしました。お化けではないかと思いました。

そのちつぽけな、まっ黒なのつぺらぼうなやつは、ヒョイとうしろをむくと、顔に目がひとつしかない一つ目小僧かもしれない。そして、赤いしたをべろつと出して、「おじさん、こんにちは……。」というのかもしれないと思うと、初はつこうはゾウツとしました。

しかし、怪人四十面相の部下になるほどのやつですから、そのまま逃げだすほど、おくびようではありません。初はつこうは、しばらく、まめくろんぼのあとをつけてから、

「こらッ、ちびすけ待てッ。」

とどなりつけて、いきなりポケット小僧につかみかかりました。

ポケット小僧は、「しまった。」と思いましたが、りすのようにすばしっこく、パツと身をかわして逃げだしました。

のつぽの初こうは、身をかわされて、よたよたと前にのめりそうになりましたが、かけっことなれば、ちびすけなんかには負けるものではありません。ちよこちよこと走るまめくろんぼのあとから、初こうの長い足が、のつしのつしと追っかけます。

のつぽとちびすけのかげっこですから、すぐにつかまってしまいそうですが、初こうが、ほんきで走ったら、たちまちいきすぎてしまいますし、ポケット小僧は追っつかれても、長い足のあいだをくぐって、チョコチョコと逃げまわるので、なかなかつかまるものではありません。そのうちにポケット小僧は、岩の廊下にひらいているひとつのドアの中へ逃げこみました。

のつぽの初こうも、すぐにその部屋にとびこみましたが、ちびすけは、どこへかくれたのか、いくらさがしても見つかりません。

そこは四十面相が着がえをする部屋で、いっぼうのおしいれのようなところには、いろ

いろいろな服が、いっぱいかけてあるのです。

そのおしいれの中も、さがしましたが、ちびすけのすがたはありません。

初こうは、部屋のまんなかにつつ立つて腕ぐみをして、すっかり考えこんでしまいました。

みなさん、

ポケット小僧は、いったいどこへかくれたと思いますか。じつに、ポケット小僧の名にふさわしいところへかくれたのです。

といますのは、おしいれの中に、ずらつとかけならべてある服のなかの、いちばん大きい外套のポケットの中へかくれたのです。

むろん、いくらポケット小僧がちいさくても、ポケットの中へからだをかくすことはできません。外套にのぼりついて、大きなポケットに足を入れたまま、宙にぶらさがっているのです。

黒い外套に黒いちびすけですから、うすぐらい光では見わけが付きません。

それに初こうは、おしいれの中の床ばかりさがしていたので、上のほうで宙づりをしているポケット小僧は、どうしても見つからなかったのです。

「へんだぞ。あいつ、やっぱり化けものだったかな。」

のっぽの初こうは、腕ぐみをしたままひとりごとをいいました。

「いや、そんなはずはない。きつと、どっかにかくれている。待てよ。どうしても、あのおいしいの中があやしいわい。」

そういつて、もういちどおいしいをしらべました。こんどは、さがっている服をひとつひとつ、手でさわってみるのです。

ポケット小僧は、もう運のつきだと思いました。

いもむしごろごろ

ポケット小僧は、大外套のポケットに両足をいれ、外套にとりすがって息をころしていました。のっぽの初こうは、おいしいのすみのほうから、ひとつひとつ服にさわりながら、こちらへ近づいてきます。

もう三つめまでできました。もう二つめです。ああ、もうとなりまでできました。こんどは外套のぼんです。

初ここの長い手が、外套のえりのへんから、だんだん下へおりてきました。その手が、ポケット小僧の頭にさわりました。

まだ気がつきません。

長い手が、ポケット小僧の顔をなで、首から胸にさがってきました。

「うツ。」という、おしころした声が、聞こえました。

とうとう気がついたようです。

ポケット小僧は、外套のポケットから足をぬきだして、ヒョイト、おしれの床に、とびおりました。

「うぬツ！ こんなところにかくれていやがったなツ。」

初ここのは、両手をひろげてつかみかかっています。

ポケット小僧は、その手のあいだをすりぬけて、あちこちと逃げまわる。それを、のっぽの初ここのが、息をきらせて追っかける。じつにふしぎなおにごっこです。

しかしポケット小僧は、もう逃げられません。あいては、じぶんの四倍もあるような大男です。いつかはつかまってしまふにきまっています。

つかまったら、四十面相の前にひつたてられ、いろいろと聞かれることでしょう。拷ごうも

問んされることでしょう。

拷問の苦しさに、このあいだからのことを、すっかり白状してしまうかもしれません。そうすれば、せつかく明智先生のたてられた計略が、まったくむだになってしまうのです。それをおもうと、ポケット小僧は、泣きだしたくなりました。かばんの中にかくれて、この奇面城へしのびこんでから、きょうまでの苦労が、すっかり水のあわになってしまいうのです。

「ちくしょう、とうとうつかまえたぞッ！」

初こうのうれしそうな声がひびきました。初こうの長い手が、小僧の肩を、がっしりつかんでしまったのです。ああ、いよいよ運のつきです。

ところがそのとき、思いもよらぬことがおこりました。がっしりとつかんでいる初こうの手が、スウツと、ポケット小僧の肩から、はなれていったではありませんか。

ポケット小僧は、「オヤツ。」と思つて、初こうの顔を見あげました。

すると、初こうの口に、白いものがおしつけられているのが見えました。そのハンカチをまるめたような白いものを、初こうの口におしつけているのは、べつの手でした。

初こうの手でなくて、ほかの人の手でした。初こうの両手は、てむかいしようともせず、

だらんとさがつています。そのうちに、初このからだだぜんたいが、だらんと力をうしなつてきました。初このうしろから、白いものを口におしつけている男は、初こをだいたまま床にひざをつき、初こも床にすわった形になりました。

そのとき、はじめてうしろの男の顔が見えたのです。それはジャッキーでした。

「アツ、先生！」

ポケット小僧は、おもわず叫んで、ハツとしたように口をおさえました。「先生！」などと呼んだら、ジャッキーに化けている人の正体がわかってしまうからです。

「あぶないところだったね。ぼくは、きみがここへ逃げこむのを、むこうから見たので、いそいで麻酔薬ますいやくをしまったハンカチを持ってきて、こいつを眠らせたのだ。もうだいじようぶだよ。」

「すみません。おれ、ゆだんしちやつて、すみません。」

ポケット小僧は、いかにも、もうしわけなさそうに、ピヨコン、ピヨコンと、二度おじぎをしました。

「いいんだよ。きみがこれまでにたてた、てがらのことを思えば、なんでもないよ。それにしてもポケット小僧が、ほんとうにポケットの中へはいったのは、これがはじめてだろ

うね。はははは……。」

ジャツキーはそういつて、おかしそうに笑いましたが、すぐにまじめな顔になって、「しかし、こいつは、このままにしてはおけない。眠りからさめて、四十面相にこのことをしゃべったら、たいへんだからね。やっぱり、あそこへほうりこんでしまわなければ。」といいました。あそことは、いつたいどこなのでしょう。

もしかしたら、あの岩の橋をあげおろしする底もしれない谷まのことではないでしょうか。

そんなところへほうりこんだら、むろん命はありません。明智探偵や警察の人たちが、そんなむごたらしいことをするはずがありません。

では、いつたい、どこへほうりこむのでしょうか。

ポケット小僧は、その場所をよく知っていました。というのは、それを見つけたのはポケット小僧じしんだったからです。

さいしょ奇面城へしのびこんだとき、洞窟の中を歩きまわっていて、ふと、そこへまよいこんだのです。

そのとき小僧は、廊下のはずれにある、しぜんにできた岩のわれめのような、小さな穴

へもぐりこんでいました。もぐりこむと、穴はだんだん広くなり、十メートルほどいくと、そこにたたみにして四じよう半ほどもある、広い洞窟ができていました。懐中電灯で、あたりを照らしてみると、ここへはだれもはいつたことがないらしいのです。入口があまりせまいので、四十面相の部下たちは、この洞窟に気がつかなかったのでしよう。

ポケット小僧は、ジャツキーや五郎に、そのことを話したので、この洞窟を、こんどの計略につかうことになり、夜中に、ソツと入口の岩をけずって、広くしたり、その穴にドアのかわりに岩のふたをつくって、そこから見えぬようにしたり、いろいろくふうをこらしたのです。

ジャツキーは廊下にてで、あたりにだれもいないことをたしかめてから、ぐつたりとなつた初こうをせおつて、その秘密の洞窟へと、いそぎました。ポケット小僧も、あとから、ついていきます。

さいわい、だれにも見とがめられず、洞窟の入口につきました。

まず、ジャツキーが岩のわれめから中へはいりこんで、ドアがわりの石のふたをのけ、中から両手をだして、初こうのからだを、ひきずりこむのでした。

中は広くなっているのですから、入口さえ通つてしまえば、あとはらくです。初こうの

からだを、ぐんぐんひきずって、おくの広い洞窟にきました。ポケット小僧は用意の懐中電灯をだして、そのへんを照らしています。

ああ、ごらんなさい。洞窟の中には、五人の男が、いもむしののように、ごろごろと、ころがっているではありませんか。みんなさるぐつわをはめられ、手足をしばられているのです。ジャツキーは、初こうにもおなじように、さるぐつわをはめ、手足をしばりました。五ひきのいもむしが、六ひきにふえました。

ヘリコプターで五人の味方がはこばれ、四十面相の部下に化けていることは、まえにしました。そのかわりに、ほんものの五人の部下が、この洞窟にほうりこまれていたのです。

この計略は、みんな明智探偵が考えだしたものです。警視庁はそれを助けて、刑事のうちの変装の名人たちを、奇面城におくったのです。

巨人の目

いま奇面城には、四十面相と美しい女の人のほかに、十人の部下がいるばかりです。そ

のうちの七人までいれかわってしまったのですから、ほんものの部下はたった三人です。どんなことがあっても負ける心配はありません。

いよいよ、総攻撃のときがきたのです。

ジャッキーと五郎は、またヘリコプターを飛ばして、ふもとの町へいき、そこでT警察の人たちと、うちあわせをしました。

奇面城総攻撃は、あすの早朝ときまりました。東京の警視庁から中村警部がひきつれてきた九人の警官と、土地の警官隊四十人、あわせて五十人の警官隊が、山のふもとの四方から、奇面城めがけてのぼっていくことになったのです。

そんなおおげさなことをしなくても、ジャッキーと五郎と、五人のにせものの部下が、四十面相をとらえてしまえばよさそうに思われますが、あいては、なにしろ魔術師のような怪物ですから、どんな奥の手を用意しているかわかりません。奇面城の洞窟の中に、どんなしかけがしてあるかわかりません。それで、万にひとつも敵をとりながさないように、五十人の警官隊で、奇面城をとりかこむことにしたのです。ジャッキーをはじめ七人のにせものが、内部からこれにおうじて働くことはいうまでもありません。

さて、総攻撃の朝がきました。

洞窟の奥のりっぱな寝室で眠っていた四十面相は、りりりりり……んという、けたたましいベルの音に目をさました。四十面相は、ハツとしてベッドからとびだし、手ばやく金モールのかぎりのついたビロードの服をきると、となりの美術室にかけこんで、その黄金のいすにこしかけました。そして、ベルをならして、部下をよぶのでした。

入口のドアをひらいて、ジャツキーがはいつてきました。

「およびですか。」

「うん、非常ベルがなったのだ。ふもとに配置してある見はり番からの知らせだ。なにか一大事がおこつたらしい。ひよつとしたら、警察の手がまわったかもしれない。いまに、ふもとから知らせにかけつけてくるだろうが、そのまえに、巨人の目からのぞいてみよう。きみもいつしよにくるがいい。」

四十面相は、そういつて、どんだん部屋を出ていきます。ジャツキーも、そのあとを追いましたが、にせもののかなしきに、巨人の目とは、なんのことだか、それがどこにあるのか、さっぱりわかりません。

金ぴかのビロードの服をきた四十面相は、洞窟の奥の小さなドアを、かぎでひらいて、中にはいりました。

ジャツキーの知らない部屋でした。いつもかぎがかかっているのです。まだ、はいったことがないので。

そこは一坪ほどのせまい部屋で、いっぼうの岩かべに、鉄ばしごがとりつけてありました。ほとんどまつすぐにたつた、小さな鉄ばしごです。

四十面相は、それをかけのぼっていきます。ジャツキーも、あとからつづきました。四メートルほどのぼると、岩のおどりぼがあつて、そこからまた鉄ばしごがつづいています。はしごのまわりは、だんだんせまくなり、しまいには、人間ひとりやつと通れるほどの岩のすきまになりましたが、鉄ばしごは、そこをまだまだ上のほうへ、つづいているのです。

ジャツキーは、四、五十メートルものぼったように感じました。すると、やつと行きどまりました。そこは、一坪もないようなせまい岩の部屋で、いっぼうに大きなまるい窓がひらいて、明るい光がさしこんでいました。

その窓のよこの岩のたなの上に、大きな双眼鏡がのっています。四十面相は、それをとって目にあてると、まるい窓のそとをながめました。

ジャツキーも、その窓からのぞいて見ましたが、あまりの高さに、ぐらぐらつとめまい

がしました。奇面城のまわりの森が、はるか遠くのほうへつづいていきます。すぐ下を見ると、広っぱにとまっているヘリコプターが、おもちゃのように小さく見えるのです。窓といても、べつにガラス戸がはまっているわけではありません。ただ、さしわたし一メートルほどのまるい穴が、ぽつかりと、ひらいているだけなのです。うっかりすると、そこから下へ落ちそうです。目もくらむような高さですから、ここから落ちたら、むろん命はありません。

ああ、わかりました。このまるい窓は、奇面城の巨人のひとみだったのです。秘密のところだけ穴があいていて、遠方を見はらす物見の窓になっていたのです。

「あ、あすこへやってきた。三ばん見はり小屋の三吉さんきちだな。なにか重大な知らせをもってきたのにちがいない。」

四十面相がそういって、いままでのぞいていた双眼鏡を、ジャツキーにわたしました。ジャツキーはそれを目にあてて、三吉という男が、森の中のほそ道を、かけあがってくるのを見ました。

警官のすがたは見えなかと、ほうぼうさがしましたが、まだ味方は、近くまできていないようです。

三吉は、こちらを見あげて、手をふりました。巨人の目からのぞいているすがたを、見つけたのでしよう。

ジャッキーは、三吉のたちばになつて、この巨人の目が、下からどんなふうに見えるかを想像してみました。

巨大な岩の顔の、巨大な目のひとみのなかに、双眼鏡を手にした四十面相の上半身が見えるのです。金ぴかのビロードの服をきた、どこかの国の王さまのような四十面相が、見えるのです。なんとというふしぎな光景でしょう。

「よしッ、下へおりて、三吉の話を聞こう。」

四十面相は、そういつて、鉄ばしごをおりはじめました。まっすぐに立ったはしごですから、おりるほうが、むずかしいのです。

ふたりが、やっと下までおりたとき、そこへ三吉が、かけつけてきました。

「かしら、たいへんだ。警官隊が、四方からのぼつてきます。ほかの見はり小屋からも、知らせがありました。ぜんたいでは五、六十人、ひよっとすると百人もいるかもしれません。」

三吉は、息をきらせて報告しました。

「やつぱり、そうだったか。よしッ、おまえたちは、みんな警官隊とたたかうのだ。ピストルは空にむけてうて、人を殺しちゃいけない。わかったか。おまえたち、一ばんから六ばんまでの見はり小屋の人数をあわせると、三十人はいるはずだ。山のことは、おまえたちのほうが、よく知っている。相手は、ふなれな町のやつらだ。うまく知恵をはたらかせ、くいとめるんだ。」

四十面相は、そう命令して三吉をかえしました。

「さあ、ジャツキー、ヘリコプターだ。あれに乗って、もっと山おくへかくれるんだ。しっかりとやってくれッ。」

四十面相とジャツキーは、洞窟の廊下をかけたして、あの深い谷にかかっている大岩のつり橋をわたり、巨人の顔のまえの広っぱにでました。ヘリコプターは、すぐむこうに見えています。

最後の手段

四十面相とジャツキーとは、ヘリコプターの操縦室へ乗りこみました。このヘリコプタ

「は、いつでも出発の用意ができています。」

ジャツキーは、スターターのクラッチをいれました。ぶるんぶるんぶるん。エンジンが動き、プロペラがまわりはじめました。

しかし、なんだかへんです。エンジンの音が、いつもとちがっています。プロペラのまわりかたも、みようにいきおいがいいのです。

ジャツキーは機械にとりついて、一生懸命にやっていました。やがて、あきらめたように、エンジンをとめてしまいました。

「かしら、だめです。こしようです。」

「エッ、こしようです。どこがこしようですか、わかっているのか。」

「わかっていますが、きゆうにはなおりません。」

「どのくらいかかるんだ。」

「三時間はかかりますね。」

「ちくしようツ。しかたがない。おりよう。そして、べつのでだてを考えるんだ。」

四十面相は、ヘリコプターからとびおりて、巨人の顔のほうへいそぎました。ジャツキーも、あとからついていきます。

巨人の顔のくびのところに、いくつも岩あながならんでいます。そのひとつが、奇面城の門番の、三びきの虎の部屋になつて居るのです。

べつに鉄棒がはめてあるわけではありません。四十面相や部下のものには、よくなれて居るので、はなしがいにして居るのです。

その虎の岩あなへはいつてみますと、二ひきの大虎は、ぐったりと寝そべったまま、四十面相が声をかけても、しらん顔をしています。

いつかポケット小僧が助けてやった、あのかわいらしい子どもの虎だけが、かなしそうに、鼻をくんくんならしながら、二ひきの大虎のまわりを、ぐるぐるまわつて居るのです。「眠つて居るのかな。いや、なんだかへんだぞ。」

四十面相は、ふしぎそうにつぶやいて、大虎のそばに近づくと、そのからだに、さわつてみました。

「アツ、つめたくなつて居る。死んで居るんだ。いったいどうして……。」

いそいで、もう一びきのほうを、しらべましたが、これもつめたくなつて居ます。数時間まえに、息がたえたらしいのです。

「病気ではない。病気で二ひきとも、いつぺんに死ぬなんてことは考えられない。鉄砲で

うたれたのでもない。これもひよつとすると……。」

四十面相は、しゃがんで、一ぴきの虎の口をしらべました。

「アツ、やつぱりそうだ。血だツ。血をはいている。毒をのまされたのにちがいない。」
二ひきとも、口と鼻から血をたらししていました。たしかに毒殺されたのです。

四十面相は、そこにつつ立つたまま、じつと腕ぐみをして考えていましたが、ハツとしたように目を光らせました。

「いったい、これはどうしたわけだ。だれかが虎を毒殺した。だが、おれの部下のほかに、ここへ近づいたものはないはずだ。ジャツキー、なんだか、気味のわるいことがおこったぞ。ゆだんはできない。いよいよ、さいごの手段をとるほかはないようだ。」

四十面相がそういつて、岩あなのそとへでたとき、遠くのほうでピストルをうちあう音がとどろきました。警官隊と、四十面相の部下の見はり人たちとのたたかいが、はじまっています。

「ワアツ。ワアツ。」

という、おおぜいの声が聞こえてきます。そして、それが、だんだんこちらへ近づいてくるのです。どうも四十面相の部下たちの旗いろがわるいようです。

そのとき四十面相が、「アッ。」といって、広っぱのむこうの森のほうを見つめました。警官です。そこへ、ぼつつりと、制服警官のすがたがあらわれたのです。

「ワアッ……。」

という声が出たかとおもうと、四十面相の部下らしい男が、うしろからとびだして警官にくみつきました。

警官は、パツと腰をおとし首をさげて、その男を、ドウツと前へなげつけました。

男はすぐにおきあがって、こんどは前からくみついてきます。

そして、ねじあっているうちに、ふたりいっしょにたおれ、くんずほぐれつの格闘かくとうになりました。

「アッ、いけない。あたらしい敵があらわれたぞ。」

四十面相が、おもわず叫びました。

森の中から、もうひとり、制服の警官がとびだしてきたのです。そして、くみあってころがっている四十面相の部下の上に、のしかかっていきました。

とうとう、四十面相の部下は、ふたりの警官におさえられ、ぽかぽかと、なぐられています。

それを見ると、こちらの四十面相は、ヒヨイとしゃがんで、そこに落ちていた石ころを、いくつか拾ったかとおもうと、じぶんの部下の上に、うまのりになっている警官にむかつて、はつしとばかりなげつけました。

石は警官の肩にあたり、「アツ。」と叫んで、たおれそうになります。

つづいて第二弾。ビュウツとうなつて、もうひとりの警官のうでに命中しました。

警官たちは、やつと、こちらの敵に気がつきました。見ると、金モールのかざりのある王さまのような服をきています。

「さては、あいつが四十面相だな。」

と、さどつたらしく、ふたりとも、おそろしいいきおいで、こちらへかけだしてきました。「いけないツ、たいきやくだツ。」

四十面相は、手にのこつていた石ころを、警官の正面にたたきつけておいて、そのまま洞窟の入口へかけだしました。

「ジャツキー、はやく逃げるんだツ。そして、橋を落としてしまえツ。」

ジャツキーもかけだしました。洞窟にかけこんで、岩の橋をわたりました。

「さあ、この橋を落としてしまえツ。」

四十面相が叫びました。しかし、にせもののジャッキーは、どうすれば橋が落ちるのかわかりません。うろうろしていると、四十面相がたまりかねて、どこかのかくしボタンをおしました。

ダダダダダダダ……ン。

耳もろうするばかりの大音響をたてて、あの大きな岩の橋が、谷そこへ落ちていったのです。

いざというときには、くさりがはずれて、大岩が、谷そこへ落ちる、しかけになっていたのでしょうか。

谷は何十メートルともしれない深さです。そのはるか下に川が流れているらしく、ごうごうという水音が聞こえています。

谷の幅は三メートル。走り幅とびの選手ならとびこせるかもしれませんが、ふつうの人には、とてもとべるものではありません。ちよつとでもまちがえば、深い谷そこに落ちて、命をうしなうことがわかつているのですから、選手だつて、ここをとぶ気にはなれないかもしれません。

四十面相は、とうとうさいごの手段をとりました。洞窟の中とそとの連絡を、まった

く、たちきつてしまったのです。

こうすれば、そこからせめこむことは、ぜったいにできませんから、いちおう安心ですが、そのかわり、四十面相と、あの美しい女の人と十人の部下は、洞窟の中にとじこめられて、いつまでもそとへ出ることができないのです。そのうちに、食糧がなくなってくるでしょう。しかし、どこからも、食糧をはこぶみちはありません。一月もしないうちに、みんな、うえ死にをしてしまうかもしれないのです。

にせのジャツキーや、五郎や、五人のにせものの部下や、ポケット小僧までも、四十面相と運命をともしにして、うえ死にしなければならなのでしょうか。

警察官の勝利

警官隊は、いくてにもわかれて、四十面相の部下たちとたたかいながら、奇面城めがけて進んできました。

総指揮官は警視庁の中村警部です。そのそばには、三名の警官がついていましたが、もうひとり、学生服の少年のすがたが見えます。明智探偵の助手の小林少年です。小林君は、

すばしっこくとびまわって、中村警部の命令を、警官たちに伝えるやくめをひきうけているようにした。

「みんな、木の幹に、ひつくくつてしまえ。」

中村警部から命令ができました。警官たちが、大声で、つきからつきへとそれを伝えます。警官のほうが、ばいにちかい人数ですから、ふたりでひとりをやっつければいいのです。四十面相の部下を、ひとりずつとらえて、用意のほそびきで、つきからつきと、てごろの木の幹にしばりつけていくのです。

そして、一時間ほどたたかっているうちに、とうとう四十面相の三十人の部下ぜんぶを、森の中の幹にしばりつけてしまいました。警官隊の勝利です。

五十人の警官たちは、どっと奇面城の前におしよせました。なかには負傷したものも数名ありましたが、そういう人たちは、友だちの警官が、肩にかつぐようにして、つれてきたのです。

巨人の顔の下の入口に近づいていきますと、中からふたりの警官が、とびだしてきました。さいしょ四十面相を追っかけて、石をなげつけられた警官たちです。

「だめです。敵は橋を落としてしまいました。底も見えない深い谷にかかっている石の橋

です。それを落としてしまったのです。われわれは奇面城の奥へはいることができません。
」

とびだしてきた警官のひとりが、報告しました。

中村警部は、数名の警官をつれて、橋の落ちたところまで、はいつてみました。いかにも、おそろしく深い谷です。はばは三メートルぐらいですが、のぞいてみると、下はまっ暗で、はるか底のほうから、ごうごうという水音が聞こえてきます。谷底には川がながれているのです。

中村警部は、しばらく考えていましたが、やがて、決心したようにうなずきました。

「よしッ、橋をかけるんだ。森の中のごろの杉の木を二本きりたおして、枝をはらってここへ持つてくるんだ。長さはこの谷のはばの倍くらいあるほうがいい。六メートルぐらいの木をきつてくるんだ。四十面相の部下のなかに、大きなまさかりをふりまわしていたやつがあつたね。あのまさかりは、まだ森の中にほうりだしてあるはずだ。あれで木をきりたおせばよい。」

この命令が、洞窟のそとに伝えられ、警官隊のなかの十人あまりが、木をきりたおすために、森のほうへかけだしていきました。

× × ×
洞窟のおくには、四十面相が九人の部下にかこまれて、入口のほうを見ていました。あの美しい女の人は、どこかの部屋にかくれているのでしょう。ここにはすがたが見えませんが、

谷のところから十メートルもおくにいますのですが、中村警部の命令する声が、よく聞こえてきました。

「杉のまるたで、あそこへ、橋をかけるつもりらしいですね。」
ジャツキーが、かしらの顔を見ていました。

「うん、こつちは、それをふせぐんだ。物置に、まさかりがあったはずだ。あれを持ってきて、橋をかけようとしたら、たたき落としてしまえ。」

四十面相が命令しました。五郎がいそいで物置へ走って行って、大きなまさかりをかつぎだしてきました。

× × ×
三十分もすると、警官たちは六メートルほどの杉の木を二本たおして、枝をきりはらい、おおぜいでそれをついで洞窟の中へやってきました。

「五、六人で、根もとのほうをしつかりもって、むこうがわへわたすんだ。二本わたせば、その上をはって通ることができる。」

中村警部のさしずで、一本の木に六人ずつの警官がとりついて、かけ声いさましく、谷のむこうがわへ、わたそうとしました。

× × ×

こちらは四十面相。いまにも二本の杉すぎまるたがわたされそうになったので、いそいで命令をくだしました。

「さあ、いまだ。谷の岸までいって、まさかりで杉の木をたたき落とすのだッ。」

ところが、それを聞いても、まさかりを持った五郎は、にやにや笑っているばかりで、動くようがありません。

「おいッ、五郎、どうしたんだ。おまえ、警官のピストルがこわいのかッ。」

四十面相は、やつきとなつて、どなりつけました。しかし、五郎は、あいかわらず、にやにや笑っているばかりです。

「それじゃ、ジャツキー、おまえがやれ。五郎、そのまさかりをジャツキーにわたすんだッ。」

ジャツキーもへんじをしません。やつぱり、にやにや笑っているのです。

「ええ、いくじのないやつらだ。それじゃあ、おれがたたき落としてやる。さあ、まさかりをこつちへよこせ。」

四十面相が、五郎のほうへ近よろうとしますと、その前へジャツキーが立ちふさがつて、とおせんぼうをしました。

「こら、なにをするんだ。ジャツキー、おまえはまさか……。」

「そうです。じゃまをするのです。」

ジャツキーが、うでぐみをして、四十面相をぐつとにらみつけました。

「エッ、なんだと。おれのじやまをするというのかッ。きさま、おれの部下じゃないか。かしらにむかつて、なんとという口をきくのだ。」

ジャツキーは、なにもこたえないで、じつとこちらをにらみつけているばかりです。

四十面相は、ふしぎそうにジャツキーの顔を見つめていましたが、なにを思ったのか、サツと顔いろがかわりました。

「やつ、きさま、ジャツキーではないのだな。だれだッ。……もしや、もしや……。」

「ハハハハ……、やつと気がついたね。そうだよ。ぼくは明智小五郎だ。四十面相、とう

とう、ほんとうのかくれ家を見つげられてしまったねえ。」

「おいッ、五郎。そのほかのやつらも、なにをぼんやりしているのだ。こいつは明智小五郎だぞ。なぜ、つかまえないのだッ。」

四十面相は、まわりに立っている部下たちを、どなりつけました。

「ハハハハハ……。きみのほんとうの部下は、この中にふたりしかいやしないよ。あとはみんな警視庁の刑事諸君だ。変装のうまい刑事をよりすぐって、きみの部下といれかわつてしまったのだよ。」

明智が説明しました。

「アッ、それじゃあ、五郎もにせものだなッ。きさまと五郎とで、ヘリコプターを飛ばせて、ふもとの町から、かえだまをつれてきたんだなッ。」

「そのとおり。きょう、ヘリコプターを飛ばないようにしておいたのもぼくだし、二ひきの虎を眠らせたのもぼくだよ。そうして、きみをつかまえる用意がすっかりできていたのだ。……おお、見たまえ。警官隊が、橋をかけて、こちらへわたってきた。四十面相！ きみはもう、どうすることもできないのだッ。」

明智が、とどめをさすように叫びました。

最後の切りふだ

あの深い谷にわたされた二本の杉の木の上を、よつんばいになって、警官たちがつきつきとこちらへわたってきます。さきにたつ十人ほどは、もう谷のこちらがわに立って、ピストルをかまえながらしずかに近づいてくるのです。

「ちくしょう。よくも、おれをだましたな。だが、ほんとうの、おれの部下はどこにいるんだ。おれの味方は、どこにいるんだッ。」

「ハハハハ……。ぼくたち、にせものは七人。ほんものは、たったふたりしかのこっていないのだ。とても、かないつこないと、そのすみで、ぶるぶるふるえているよ。」

明智が指さしたすみっこに、四十面相のコックと、もうひとりの若い男が、青い顔をして、しょんぼりと立っていました。

「よしッ、いよいよ、おれの最後がきたようだな。おれは、血を見るのがきらいだが、こくなつたらしかたがない。かくごしろッ。みな殺しだぞッ。」

四十面相は、いきなり右と左のズボンのポケットから、一ちようずつピストルをとりだ

し、両手でそれをかまえました。

「さあ、ぶっぱなすぞッ……。」

カチツ、カチツと、両方のピストルのひきがねをひきました。どうしたわけか、たまが飛びだしません。また、カチツ、カチツ……カチツ、カチツ……。だめです。カチツ、カチツというばかりです。

「ハハハハ……。その二ちようのピストルには、たまは一ぱつもはいつていないよ。ぼくが、ピストルのたまをぬくのをわすれているほど、うかつだと思うのかね。きみは、いつものぼくのやりくちをよく知っているはずじゃないか。ハハハハ……。」

それを聞くと、四十面相の顔が、むらさきいろになりました。

「ちくしょう。いよいよ、おれの力を見せるときがきたなッ。さあ、つかまえるならつかまえてみろッ。」

かれは、そう叫ぶと、二ちようのピストルを、なげつけておいて、パツと走りだしました。おそろしいはやさです。

ジャツキーも五郎も、そのほかのにせの部下たちも、それから谷をわたってきた制服の警官たちも、四十面相のあとを追ってかけだしました。

四十面相は、まずじぶんの部屋にとびこむと、あの美しい女の手をひいて、べつのドアからかけだし、奥へ奥へと走っていきます。女の人は白いスカートのすそをみだして、いまにもたおれそうに見えます。

廊下が枝みちになつて、岩の階段が下へおりています。四十面相と女の人は、そこをかけおりました。岩のトンネルのようなどころをとおつて、八畳ぐらゐの洞窟にでました。

明智探偵たちは、四十面相につづいて、その洞窟にはいりましたが、ここには電灯がついていないので、まつ暗です。みんなが懐中電灯をつけようかと思つていますが、洞窟の中が、パツと明るくなりました。

空中にたいまつがもえているのです。赤いほのおが、めらめらとのぼつて、洞窟の天井をなめています。それは、四十面相が、一本のたいまつに火をつけて、高くさきげているのでした。白衣の女の人は、四十面相の左手にかかえられて、やっと立っているように見えます。

「明智先生、それから警視庁の先生たち、みんなそこへやってきたね。ワハハハ……。いいか、よく見ろ。ここにたるが三つならんでいる。ほら、大きなたるが三つだ。この中に、なにがはいっていると思う。……火薬だよ。このたいまつをなげこめば、いちどに爆

発するんだ。

この部屋は、おれの美術室のま下なんだ。あそこにかぎってある何億円の美術品が、こつぱみじんになるのだ。いや、そればかりではない。この岩の天井が落ちて、きみたちは、ひとりのこらず死んでしまうのだ。ワハハハハ……。ゆかい、ゆかい。どうだ、おれの最後の切りふだがわかったかッ。」

四十面相は、きちがいのように笑いながら、手に持ったたいまつを、火薬のたるの上で、むちやくちやにふりまわしているのです。

火の粉がたるの中へ落ちたら、たちまち爆発がおこるでしょう。そして洞窟そのものが、こつぱみじんになり、人間はみんな死んでしまうのです。

そのときです。

闇のなかから、四十面相とはちがう、みような笑い声がひびいてきました。

「ワハハハハハ……。ワハハハハ……。」

それを聞くと、四十面相は、ギョツとしたように、キョロキョロと、あたりを見まわしました。

「やい、そこで笑っているのは、だれだッ？　なにがおかしいのだッ。」

「ぼくだよ、明智だよ。きみのいきごみがあんまりおおげさなので、ついおかしくなったのさ。おい、ポケット君、もういいから、出てきたまえ。」

明智が呼びますと、三つならんだたるのうしろから、まっ黒な小人がチョコチョコとかけだしてきました。

明智は、その小さい黒んぼを、だくようにして、

「おお、ポケット小僧君。きみはあの三つのたるに、どういうことをしたか、いってごらん。」

「先生、もう明智先生といってもいいのですね。ぼくは先生の命令で、ばけつに水をいっぱいいれてなんどもここへはこびました。そしてその水を、いっぱいになるまで、三つのたるにいれました。」

ポケット小僧のことばに、四十面相はハツとして、ふたのどつてある三つのたるに、つぎつぎに手をいれてみました。どのたるも、火薬の上まで、水がいっぱいです。

「ワハハハ……。どうだね、火薬がこう水びたしになってしまつては、いくらたいまつをなげこんでも、パチツともいいやしないぜ、気のどくだが、きみの運のつきだよ。最後の切りふだがだめになつてしまつたのだから、あとは手錠をはめられるばかりだね。」

明智のことばが、おわるかおわらぬうちに、もえさかるたいまつが、パツと飛んできました。明智がとつきに体をかわしたので、たいまつはうしろの岩かべにあたって、火ばなをちらしました。

たいまつがつぎにとびついてきたのは、人間のからだでした。四十面相が、うらみかさなる明智探偵に組ついてきたのです。

ふいをつかれて明智はたおれ、四十面相は、その上にうまのりになりました。

しかし、四十面相の味方は、かawaii女の人ひとり。明智のほうには、たくさんの警官がついています。四十面相は、一度はうまのりになったものの、すぐおしたおされて、手錠をはめられてしまいました。

手錠をはめたのは、警官たちのうしろからでてきた中村警部でした。そして、そのそばには、学生服の小林少年が、にこにこしながらつきそっていました。

「おお、中村君、小林もよくきてくれた。とうとう、四十面相をとらえることができたよ。」

明智探偵は、中村警部と小林少年に両手をのばして、あくしゆしました。

「小林さん、ぼくここにいますよ。」

黒いシャツ、黒い手ぶくろ、黒いくつした、すっぽりかぶる黒い覆面、全身まっ黒な小人が、つかつかと小林少年の前に進んで、その手をにぎりました。

「おお、ポケット小僧、きみはえらいねえ。この奇面城を発見したのも、火薬に水をかけて、四十面相をこうさんさせたのも、みんなきみのがらだからねえ。」

小林少年はポケット小僧の手をにぎりかえして、さもなつかしそうなうしろ向きで話した。

「おれ、うれしくってたまらないよ。明智先生が四十面相に勝ったんだ。そして、四十面相がつかまってしまったんだ。」

ポケット小僧は、そこまでいうと、感きわまつたように両手をあげました。

「明智先生、ばんざあい。小林団長、ばんざあい……。」

すると、小林少年も、目に涙をうかべながら、これにこたえて叫ぶのでした。

「少年探偵団、チンピラ隊、ばんざあい！」

青空文庫情報

底本：「奇面城の秘密／夜光人間」江戸川乱歩推理文庫、講談社

1988（昭和63）年6月8日第1刷発行

初出：「少年クラブ」講談社

1958（昭和33）年1月号～12月号

入力：sogo

校正：茅宮君子

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

奇面城の秘密

江戸川乱歩

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>